
ブザービーター

龍瞳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブザービーター

【Nコード】

N6041F

【作者名】

龍瞳

【あらすじ】

主人公大介の高校生活の物語。恋愛や部活動バスケットボールを通して成長していく姿を描いております。

01 勧誘の手紙

入学前の一通の手紙…。

それは来月から通う高校のバスケットボール部からだった。中学時代にバスケット部に所属していた奴ら全員に勧誘の通知が行ってるのだろう。他の部はどうなんだ…？

中学時代、何度か練習に行った事があるので知っているが、この男子部は弱い…。弱いというか、男子は部員数が少ないのだ。

そもそもこの高校は数年前まで女子高だった。昨今の少子化で近くにあった高校が廃校となり、伝統あるこの女子校が残される事になった。そして、その際男女共学の高校へと生まれ変わったのだ。

恐らく俺が入部すれば一番背が高いだろう。それに入部したら即レギュラーになる自信だってある。だが俺は決めている…。俺はバイトをして、彼女作って、楽しい高校生活を満喫する事を…。夏のあの糞暑い体育館で汗まみれになるなんて真っ平ゴメンなのだ。

「大介！」

母親がずっと下の階から俺を呼んでいたみたいだ…。ウチの親は共働き…。親父は大型家電チェーンで働き、母親は看護師をしている。といっても先日、俺の中学卒業を期に離婚届けを役所に提出したようだ。

母親が朝からいるという事は、非番か夜勤明けなのだろう。その母親が俺の頭からヘッドフォンを取り上げ名前を呼んだのだ。

「なんだよ、びっくりするだろ！」

「さっきから呼んでたけど返事がないから、部屋まで来たんでしょ

「!?」

「でー、何？」

「孝正君来てるわよ。久しぶりに見たから分からなかったけど、男っぽくなったわね。」

「タカ？なんだろう？」

「知らないわよ。玄関で待ってるから早く行きなさい。」

「分かったよ。」

階段を降りていると『たまには部屋掃除しなさい。』と後ろから聞こえてきたが、そこは聞こえないフリ。

「よう！」

「よう！」

「どうした？タカがウチ来るなんて珍しいな！小学校の時以来じゃね？」

「そんな前か？」

「で？今日はどうした？なんの用？」

「いや…、大介にも手紙きてるんだろ？その…、バスケットから…。」

バスケット部を引退して忘れてたが、タカは中学時代に同じ部活で汗

を流した仲だ。小学校の時もミニバスで同じチームだったのに、高校まで一緒になるとは…。要は腐れ縁ってやつだ。

「俺は行かないよ。行くなら一人で行ってくれ！」

「なんでだよ。どうせ高校でもやるんだろ？春休みで暇なんだから、高校行って汗流そうぜ！」

「バスケは中学で止めることにした！」

「なんで？高校でも一緒にやろうよ。」

「一緒って…。」

「大介、ちょ、ちょっと待ってな…。」

そう言つて、タカが一度玄関を出ると何やら誰かいて、そいつらと話している。誰だ？と思つてると再びドアが開いて、そこにいた人物と目が合った。

「こんにちは神田君。」

「ふつ、福島さん…？それに直江さんまで…。」

この同じ中学の女子バスケ部にいた2人も同じ高校に進むのだ。中でも福島さんの方は“カワイイ子”だなとひそかに思っていた。しかし3年間一度も同じクラスになった事がなく、ついに一度も話す機会が無かったのだ。その福島さんが目の前にいて、俺と話している…。顔に出してないつもりだが結構ドキドキしているのだ。

「どうも。」

「どうも…。」

「神田君バスケしに行くよ！」

女子部のキャプテンだった直江さんは、結構強気に強引なプレーをする子だったが、こんな時の言動も強気なのだ。

「悪いな…。俺このあとバイトの面接行く予定なんだよ。」

本当は…、福島さんがいたから、行ってもいいかな…ってグラついたけど、残念ながら2時間後の11時にバイトの面接なのだ。

「何処でバイトするの？」

「採用されるか分からないけど、駅前のスターキングコーヒー。」

「えっ？」

「何、どうした陽子？」

「いや、ウチのお姉ちゃんもそこでバイトしてるから…。」

マジ！？福島さんにお姉ちゃんいるんだ…。

「本当？だったら陽子から不採用にしてもらっように言つてよ。そして神田君も晴れてバスケ部入部！」

「なんでそうなるんだよ？」

「それは…。」

ん…？なんだこの間は…？

「そつ、それはあれよ…、ん〜と、同じ中学の子が多い方がいいじゃない！」

「男女別だから意味なくね？」

「ん…、まあ…。」

「とりあえず今日は面接だから無理だつて…。」

「じゃ、明日も迎えに来るから、明日は準備しておいてね。」

「なっ！？」

全く直江つて奴はウザいな…。出来るなら春休みに学校なんて行きたくないものだ。

02 口の軽い男

結局バイトには採用されて、翌日からバイト生活が始まる事になった。それを知ってか知らずか、こいつはその朝から俺を起こしてきたのだ。

「なあ、行こうぜ？」

「今更言つのもなんだけどさー、タカって昔っから空気読めない奴だよな。」

「なんだよそれ？」

「いや、だからさー、昨日の俺のこと見てて、“こいつ高校でバスケやるつもり無いな！”って感じなかったわけ？」

「えっ？そうなの？やらないの？」

分かってたけど、タカは相変わらずな奴だ。

「悪いな。」

「他にやりたい部活でもあんのか？」

「帰宅部だよ。」

「帰宅って…、何にも入らないわけ？」

「分かんねえ…。それに男子の数だって極端に少ないんだから、ど

んな部活あるかわかんねえだろ？」

「まあ…。でもバスケットに男子部はあるぜ！」

「それは俺も知ってる。」

「そっか…。そうだよな…。」

「とにかく、俺は今日からバイトだから行けねえから。」

「分かったよ。悪かったよ…。じゃ…。せめて4月から一緒に学校行こうぜ。」

「ああ、分かったよ。」

「って、高校すぐそばなんだし、小学生じゃないんだから一緒に行かなくても…。」

「そんじゃ、その頃になったら電話するよ。」

「分かった…。そうだ！」

俺は昨日思った一つの疑問をぶつけてみた

「タカっていつからあの二人と仲いいの？」

「いつからって…。直江とは部長同士だから、一緒に抽選会に行ってたし…。」

「なるほどね…。福島とは？」

「福島さんとは同じクラスだったから？かな…？でもあんなに話したのは昨日が初めてだな…？」

「そうなんだ…。」

直江はどうでもいいが、福島陽子と仲良くなったのは羨ましい限りだ。

「今日は表に待ってないぞ！」

玄関のドアが開きっぱなしなんだから、そんなのは分かりきっている事実だった。

「よろしく言っておいてよ。」

「分かった。あーそうだ。これは言うなって言われてるんだけどさー、直江がお前の事好きっぽいぞ。」

「なっ！」

「お前あいつの事どうよ？」

「どっ、どっって…。」

なんで福島陽子じゃなくて、よりによって直江…、直江の下の名前ってなんだっけ？ってというか下の名前も知らない子のなんだから、100%興味無いに決まってる。

「どうなのよ？」

選ぶ権利があるなら、俺は確実に福島の方を選ぶ。だけどここでコイツに“福島さん可愛いよな”みたいな事は言えない。なぜならこいつは口が軽いからだ。

「聞かなかつた事にしてくれ！」

「ん…？うん、分かったよ。」

あれっ？なんか勘違いされてないか？タカにははつきり言った方がいいか…？

「タカちよつと待て！これだけははつきり言っておくけど、」

「うん。」

「俺は直江には全く興味ないからな！」

「あん？」

「いや、だから…、」

「そこまで言うか？」

「えっ？」

「それって酷くね？」

「だから…、ていうか、タカはどっちの味方なわけ？女の直江の味方するってか？」

「いや…、味方って…、」

「まあ、いいけど…、」

「うん…、あつ！俺、遅刻するから行くわ！」

「おう！気をつけてな！」

自分に都合が悪くなったからか、タカは時計の無い左腕を見てそう言ったのだった。

振り向いて去るタカに向かって、

「直江に余計な事言うなよ！」

これに振り返る事なく左腕を振って応えてくれた。喋らないでいてくれるかどうかは分からない。でも言わずにはいれなかった。

03 バイト

「よろしく願いします。」

「神田君は元気がいいわね。」

「あつ、すみません。」

「いえ、いいのよ。私が一応今日この時間の責任者の見竹です。よろしくね。」

「よろしく願いします。」

「早速なんだけど…、」

どうやらこの女性社員の見竹さんが、今日は色々教えてくれるみたいだ。そして、まずは接客…ではなく、コーヒーを煎れる方から教えてくれるらしい…。

「神田君ってモテるでしょ？」

「えっ、どうですかね？」

「自覚ないの？」

「はあ…。」

「うちの店のバイトの子って、レベル高いわよ。」

「は？レベル…？」

言われてみれば、今いる子は綺麗…、いや、可愛い。男はこの時間俺しかないから分らないけど…。

「店長みたくバイトの子にちょっかい出さないでね。」

「ちょっかいですか？」

店長め、職権乱用か？

「そう。頼むね。」

「はあ…。だったら、誘われる分には、いいですかね？その…、」

「随分自信あるのね？」

「いや…、その…、彼女募集中なんで…、そうだ！見竹さん今度ご馳走して下さい。」

「私？」

一瞬このお姉さんが照れたように見えた。

「ダメっすか？他のスタッフに手を出さない抑止にもなりますよ！」

「うん、分かった。私と休みが一緒の日だったらいいわよ。」

俺のシフトは、基本的に月水金の夕方5時からラストの10時までと昨日の面接で決まった。あと突発的な休みが出たら、来て欲し

いと言われている。

俺のシフトは、まだ見竹さんには伝わってないらしく、そう言ったのだろうとこの時は思った。が、要は年上の見竹さんに上手くかわされただけなのだ…。

見竹さん以外に今いるスタッフは2人の女性だった。仕事をこなしていくうちに、そのスタッフとも会話するタイミングがあり、“好みのタイプ！”と思ってた子が福島のお姉さんだった。よく見ると似てる。

姉妹揃って可愛いなんて、なんてすごい確率なんだろう…。完璧に両親のDNAがいいに違いない。とにかくお姉さんとは、徐々に近づいて仲良くなるしかない！しかしこの日の仕事中は、業務的な会話以外はまるで無く、プライベートな話は無しだった…。

このバイトは常に立ち仕事で、意外と疲れる事が分かった…。見た目と実際にやるのでは全然違ったのだ。

片付けが終わり、更衣室で着替えてると見竹さんに呼ばれた…、

「はい、これ。」

「はい？」

何だ？と思って渡されたのは、スタッフ全員の載ったスケジュール表と一枚の名刺で、名刺の裏には携帯番号とアドレスが手書きで書かれていた。

「神田君も携帯買ったら教えてね。」

そうなのだ。小学生でも持たされているこの時代に、中学時代の俺は持つ事を許可されていなかった…。でもついに、入学祝いという名目で、4月に親父の勤める家電屋さんで買ってもらえることになったのだ。一応母親からのプレゼントは自転車で、今日もすでに

それに乗って来ている。

「分かりました。春休み中にはゲットする予定なんで、初メールは見竹さんに送ります。」

「あら！？なんだか悪いな…。でも、ありがと！楽しみに待ってる。」

「はい。」

「あと、福島さんを途中まで送っていつてくれない？さっき神田君の履歴書で住所見たんだけど、案外近そうだし…。」

「はあ…、」

確かに妹の陽子とは同じ中学だから、俺はお姉さんの後輩に当たるわけで…、すなわち同じ学区に住むという事になる…。

「神田君が送り狼にならないでよ！」

「しっ、しませんよ！」

「噛んでるし。」

「たくっ…。」

そこへ俺がいるため店内のトイレで着替えていた福島陽子の姉冴子さんが、同じくバイトの新田さんと出てきた。

「福島さん、今日はたくましいボディガード付けるから、安心して

帰れるね。」

「安心して？」

「そうなのよ。ウチの子達ホステスでもないのに、店には女の子目的の常連さんがいてねー。ちょっと間違えばストーカーなんだけだね。」

「私、大丈夫です。一人で帰れます。」

「いやいや、逆に送らせて欲しいです。…って、俺もそいつらと変わらないか？」

「いや、送りますよ！これでも空手習ってたことあるので、いざとなったら力になりますよ！」

部活が忙しく中学に入って辞めたけど、先生からは『いいセンスしてるのに勿体ない。』と言われたほどだった。

「へーっ！デカイだけかと思ったら意外と男らしいところあるんだ？」

「意外つての余分じゃありません？」

「ははは…。」

そんなこんなで、俺は福島姉こと冴子さんを送って行くことになったのだ。

04 冴子さん

「神田君ゴメンね。」

「いえ、かまいません。ほとんど通り道ですから。」

家の場所を聞いたら、メインの通りの一本裏の道で、これならば
ぼ通り道だ。それにウチからも近い。

「実は俺、妹さんと同じ部活だったんすよ。」

「みたいね。朝、陽子から聞いた。神田君って大きいもんね。」

「たまにデカくて怖いって言われますけどね。」

「そうなの？」

「はい。コンプレックスに感じたことはないですけど、『デカイ』
って言われると結構ショックです。」

「もうバスケやらないの？」

「バスケ部男子は弱いみたいなんです。女子は強いみたいですけど
ね。」

「知ってる。」

やっぱり県の代表になって全国大会に出るくらいだから有名な
だ…、

「私も去年まであそこにいたから…」

「えっ？あの…、OG…？お姉さんっておいくつですか？」

女性とはいえ、若いから歳を聞いても平気だろう。

「18よ。この3月に卒業したばかり…。去年の6月に引退するまで私もあのコートの上にいたわ…」

「お姉さんもバスケやってたんだ…」

「プレーは1年間だけ…、あとは実質クビだけだね…」

「クビ？高校の部活でクビなんてあるんすか？」

「女子部はね。毎年40人くらい入部してきて、3軍まであるの…。中学時代有名な選手でも監督が気にいらないと即2軍行きでさ…」

マジかよ…、

「それでどんどん辞めていって、新人が入ってくる4月には30人近くは辞めてるわね…」

「1年で30人も…」

「ベンチにはレギュラー含め15人しか入れないから、1、2年でいい選手がいれば、3年だって試合で応援席から観戦ってこともあるのよ…」

「そうなんすか…。」

「だから2年からは男子部のマネージャーやってたの。だけど男子は弱くてさ…。人数だつてせいぜい毎年2、3人だしね…。」

「それじゃ、ゲームも出来ないじゃん!？」

「だからマネージャーが男子の練習に混ざるの。」

「へっ?。」

「私が3年の時は、部員6人マネージャー6人の仲良しクラブだったからね。」

「マジっすか?もしかしてその中でカップルがいたとか?。」

「もちろん。でもウチの高校つて…、もう卒業したから『ウチの高校』つて言い方変よね。」

「いえ…、」

「あの学校つて、ちょっとしたハーレム状態だから、変な奴じゃない限りモテるのよ。だから二股されてるとか色々あってなんかね…。」

「なんだかハーレムつていい響きだ!」

「ウチらの代の男女比が1対7だったし、1コ下の…次の新3年も1対4くらいで、2年は1対3くらいになったみたいだね。」

そうなんだ…、ハーレムか…、

「神田君聞いてる？」

「…。」

「神田君？」

「えっ！？あつ、聞いてます、聞いてます。」

「で、話をバスケットに戻すけど、陽子が言うには今年の男子は粒ぞろいらしいの！なんでも県で優勝したチームのガードとセンターがいて、神田君のチームメイトだった浅野君に…、」

「えっ？今、誰って言いました？」

「ん…、えゝと浅野君？」

「その前！タカの前に何て言った？」

「あー、県で優勝したチームのガードとセンター…、」

「マジっすか？」

「ええ…、だから出来れば神田君にも入って欲しいかなって、思ってた…、神田君って中学時代は相当有名な選手だったんでしょ？」

マジかよ…、ウチらが準決勝で負けたチームのガードとセンターが同じ学校に入ったのかよ…！？いや、待てよ…、あいつらなら強豪校に引っ張られてもおかしくない実力の持ち主のはず…。なんで

ウチの学校に…？俺みたいに断ったのか？レギュラーじゃなくて控えの方のメンバーか？

「ちょっと神田君聞ってる？」

「えっ？」

俺が考え事してる間にも、冴子さんは俺に話しかけてたみたいだ。

「なんでしょ？」

「だから神田君もバスケット部入ってよ。」

「無理すよ。」

「なんで？」

「なんでって…、バイト入ったばかりだし…、」

「辞めちゃいなよ。」

「そしたら、俺、昼飯食えなくなります。」

「そうなの？お小遣は？」

「ないですよ。4月からの携帯料金も自分で払わないといけないですし…。」

「大変なのね…。」

「冴子さんが貢いでくれるなら考えますけど！」

「えっ？」

「冗談す。」

「……いくら欲しい？いくらあつたら足りる？」

「えっ？」

「だから、月にいくらあつたら足りるの？」

「いや、お姉さん冗談すから……。それに俺って育ち盛りで、今、食欲底無しですし……。」

「そっか……。ちょっと考えちゃった……。」

マジかよ……？見竹さんといい、冴子さんといい、俺ってなんかの素質あるのかな……？ジゴロ？なんか違うな……。甘え上手？でも年上もありかも……。

05 予想外の訪問者

今日はバイトが休みで、予定も無いし暇だった。そこで俺は高校にバスケの見学に行く事を考えていた…。入部するつもりはないが、福島さんが練習してるなら見に行ってもいいかな…。そう思ったのだ。だけど…。いくら待ってもタ力が迎えに来ない…。

さすがに昨日あれだけ言ったら来ないか…。?と想着たら、家のチャイムが鳴った。おっ!?!さすが空気読めない男!と思いつつドアを開けると…、

「おはよう神田君!」

「おは…よ…う…。って、何?福島さん一人?」

「うん。」

「あつ、そう…。で、どうした?」

「えっ…。あ…。うん。」

そこに運悪く近所のおばちゃんに見つかって、

「大介彼女でも出来たんか?」

と冷やかされてしまった。俺も福島もバツが悪い。俺は開き直って、

「そつだよ。だからデート代貸してーや!」

「大介に貸したら返ってこないから無理や!」

「まったく、口の悪いおばちゃんやな!」

「おおきに!」

近所で有名な関西出身の人で、この人の家族と話す時にだけ、なんちゃって関西弁を使ってみるのだ。

「今日も部活行くの?」

「私は諦めた。」

「はあ? 諦めた? って、バスケ部入らないってこと?」

「うん...。」

「まだ2日行っただけだろ?」

「だって...、部員数多いし、新人の子に話聞いたら、中学の大会で上位の常連のレギュラーの子ばかりだし...、」

「ふうん、そうなんだ。で、そんな福島さんがウチに何しに来たの?」

「えっと...、それでお姉ちゃんと一緒に...、」

「マネージャーやるとか?」

「えっ? あっ、聞いたんだ?」

「まあ…、」

「男子部のマネージャーやろうと思ってて…、」

「なあ、福島。」

「ん…？」

「家上がつてかね？どうせ今日は部活に行かないんだろ？」

「えっ…、あ…、」

「いいから、近所の目もあるしさ…、」

そう言つて強引に福島の手を引っ張つて、部屋へと上げたのだ。
俺は一度一階に下りて、紅茶の準備を済ませて部屋へと戻った。

「男の子の部屋に入るの初めて！」

「そうなの？」

「うん。ウチは二人姉妹だから…、」

「あー、冴子さんね。お姉さんも可愛い人だね。」

「そうかな…？」

なんか照れてる。でもそんな、はにかんでる顔も可愛い…。多分『お姉さんも』って言ったからだろう。その言葉には“陽子ちゃん

も可愛いけど、お姉さんも…」という前置きが隠れているからだ。だけど、そこは直接言わずに、遠回しに言ってみた。

「で、今日は俺をバスケット部にも勧誘しに来たの？」

小さく頷いて、こつちを見る。

「タカに頼まれたとか？」

「タカって浅野君だよな？」

「そう。」

「それもあるけど…、私も高校で神田君のプレー見てみたいし…。」

「福島さんが俺の彼女になってくれるんだったら考えてもいいけど？」

ちよつと鎌をかけてみた…、反応をみていると視線を反らされた…。脈無しか？

「昨日冴子さんにも言ったんだけどさ…。」

「ねえ？」

「ん？」

「お姉ちゃんの事名前と呼んでるんだね？」

「いや…、バイトの人が『サエコ』って名前で呼んでたから…、つ

い…。」

「そう…。」

「ダメだったかな？」

「いいけど…。で、考えてくれない？」

「何を？」

「部活！」

「部活か…。」

「堀北中の大島君と加藤君も、昨日も一昨日も来てたみたいよ。あの二人って中学の時全国大会行ってる有名な人達だよね？」

「堀北中ね…。でも全国大会じゃ、2回戦負けだけだね。」

「だけど、上手いって事でしょ？」

「まあ…。でもあの二人はスコアラーじゃないからな。」

「スコアラー？」

「スコアラーって言わない？」

「悪かったわね！素人みたいで！」

「いや…。直訳すれば得点者だけど、バスケに限れば点取り屋って

事だよ。」

「ふん。」

「堀北中のガードは、ゲームメイクは上手いしすばしっこい奴だけど身長が低い…。センターの方は、リバウンドはズバ抜けて凄い選手だけど、点を取るタイプじゃない…。試合でマッチアップしたけど、あんまり勝負してこなかったな。」

「浅野君だっているじゃない！中学の時は神田君の次に点取ってたんでしょ？」

「タカは…、そうだなスリーポイントの確率はいいし、体力もあるから走り負けない。速攻重視のチームならフィットするかもね。」

「そして神田君！」

「随分俺にこだわるね？」

「そりゃ…、ウチの県の中学のベスト5に選出された逸材だもん…。その身長で、外も中もこなせるプレーヤーだし。」

確かにベスト5には選出された。だが俺らは準決でそいつらに負けたのだ。所詮俺とタカでもってたチームで、選手層も薄い、ディフェンスの弱いチームだった。

「悪い…、実はウチの親が俺の中学卒業を期に正式に離婚してさ、しばらくは節制しなきゃなんだよ！ココに住めてるだけでもラッキーだし。生活厳しくなるだろうから、俺も少しくらいバイトして負担減らしたいしさ…。だから遊んでる暇無いんだ。」

かと言って俺と親父の仲は悪い訳ではない。携帯電話も買ってくれる予定だ。

「離婚したんだ…。そう…、ゴメンね…、神田君の家庭事情知らなかったから…。」

「だからバイトして、昼飯代とちよつとした小遣いくらい、自分で稼がないとな。」

「そっか…。」

どうやら福島は俺の事情を理解してくれたようだ。やっぱりタカにも言った方がいいかな…。

06 強引な俺

それからお姉さんの冴子さんの事をとか色々と話をした。だけど肝心の本人の話になると言いたくないようで口ごもるのだ。

「そうゆう神田君はどうなの？好きな子いなかったの？」

「俺？そうだな…、可愛いなとか、綺麗だなんてのは思う事もあったけど、きつかけがなくてね。」

「ダメだよ。男なんだから積極的に声かけなきゃ！浅野君と神田君は人気あつたんだから！」

「そうなの？」

「うん…。」

「ちなみに福島はどっちかといえば、どっちだったの？」

さつき“中学の時、好きな奴いた？”って質問した時には答なかったから、今度は違う角度から聞いてみた。

「えっ？」

「だから俺とタカだったらどっち派だったの？俺派？タカ派？」

「私は…、」

タカ派か…？もしそうだったらガツカリだな…。逆にどっちもイ

ヤ！ってバツサリいかれたりして…。

「和代は神田君が好きみたいよ。彼女募集中なら和代と付き合ってみれば？」

和代って直江か？もしそうならパスだな…。

「福島のことを聞いてるんだよ。タカ派？」

チラッと福島の方を見ると、どうもそんな感じだった。

「そっか…。」

「違うの…、」

ん？

「和代とね…、和代と誰が好き？みたいな話をしたことがあって、私も始めは、神田君ってバスケ上手いしカッコイイな…って思ってたの。でも…、和代に『神田君の事好きだから取らないでね！』みたいな感じで言われて、つい私は『浅野君の方がタイプかな…、』って、口から勝手に出ちゃって…。」

勝手にって…、

「で、回りもなんだかそんな感じで見始めて、気付いたらそうなのかな…って、自分でも思い始めて…。」

恋は勘違いからってパターンか…？

「結局、本当に好きかどうか分からないんだけどね…。」

「告白してみれば？福島なら大概の奴がOKすると思うよ。俺が保証する。」

「そんな…。そんなこと言ったら神田君の方が大概の子がOKするよ。」

「だったら、俺と付き合ってよ。」

「え…、」

ダメか…？それとも迷ってくれてる？
しばらく沈黙があって苦しかった。

「タカが良かったら、俺からタカに言ってやるよ。福島がお前の事好きらしいぞ！って。」

「やつ、止めてよ！そんな事しないでよね！もしそれでフラれでもしたら、マネージャーやりづらくなっちゃうじゃん！」

少し分かった事がある。少なくとも福島はタカの事が気になるみたいだ。それとも…、それともちゃんと告ってみるか？

「分かったよ。」

「神田君は？和代の事はダメ？」

「ちょっと待って！さっきから言ってる和代って誰？」

「和代は和代よ！直江和代！下の名前知らなかったの？」

やっぱり直江か…、

「彼女には全く興味ないからな…。」

「えっ？」

「あつ、ゴメン。直江は女として意識した事ないからさ…。」

「そっか…。」

これでタカからも福島からも、今後この話が出ることはないだろう。

そこに夜勤明けなのか母親が帰ってきたらしい。

「大介いる？」

っていうかワザと大きい声出しているに違いない。玄関に女の子のブーツがあつて、部屋にいるのは明確なのだ。

「悪い。紅茶でも飲んでちょっと待ってて。」

「うん。」

そう言つて一階に行くと、

「何？何？新しい彼女？」

「ちげーよ。」

「だったら…、」

「恋の相談ってやつだよ。」

「ふーん。まあ、相談してたらいつの間にか恋に落ちてたってパターンもあるから、頑張りなさいよ。」

「はあ…？そっちは？夜勤明けだったの？」

「ん？まあね。」

俺は知っていた。親父の浮気が離婚原因だったが、母親の方も随分昔から医者と遊んでる事を…。でも親父は一切知らないだろう。男って奴は自分の奥さんや彼女が、浮気なんかしてないと思い込んでしまう質らしい。

「ちょっとデートしてくるから臨時の小遣い支給してよ。」

「彼女じゃないんでしょ？」

「だって夜勤明けなら、これから寝るんだろ？うるさくしたら悪いから俺らが外で…、」

「ん…？まさかその娘襲うつもりだったの？」

「何言ってるの？」

「ちゃんと避妊するんだよ！」

「あー？だから、彼女じゃないんだから襲わないって！」

「ふん、彼女だったら襲うんだ？ちよつと待ってな。」

「おーい！揚げ足取るなよな…。」

そう言つて母親は自分のベッドルームに行くとか何か持つて出てきた。小遣いくれるのか？一万円札か五千円札か…？と、右手で受け取った感触はお札ではなく、なんだかビニールっぽい感じ…？何だろ？と思つて見てみると、なつ、なんと！コンドームだった。

「エッチするのに相手の合意がなかったら、しちゃダメだからね。」

ウチの母親はどうかズレてる…、それとも俺がズレてるのか…？

「じゃ、私は出かけるから。」

「どこに？」

「仕事仲間と買物。じゃ、戸締まりお願いね。」

「分かつてる！」

戸締まり！？泊まりか？つて、男か？

母親が出掛けたので部屋に戻ると、福島が俺の机の上にあつた少しエッチな本に見入っていた。つていうか、普通それを見ないだろ！そして俺はそつと福島の後ろに立ったのだ。

「その本あげようか？」

「ワッ！」

びっくりして本を閉じてこっちに振り向いた。目が合う。俺は福島に少し顔を寄せ、

「女の子でもそうゆう本に興味あるんだ？」

「そつ、そんなわけないじゃん！」

なにやら動揺しまくりで、額から汗が噴き出しそうな勢いだ。なんだか見つめ合ってるみたいだったので、思いつ切り顔を近付けてみた。こっちもドキドキだが、相手もドキドキしてるはずだ。

「神田…君…？」

チュツ…。勢いに任せてキスしてしまった。フレンチなキス…。不安げな顔をして俺を見ている。そして少し顔を離れた。

「俺と付き合おうよ？」

「…。」

「一応、真剣に言ってるんだけど？」

「…。」

「前から福島の事いいなっと思ってたし…、」

「嘘…？」

「マジ。」

「でも…、和代に何て言ったらいいか…？」

「それって彼女になるのはOKって事？」

「いや…、だから…。」

「よし！付き合いだした報告をどうやって直江にするか一緒に考えよう！」

「……うん。」

アレ…？これってOK…だよな？やっぱり男には強引にいくとも必要か？

「神田君…、」

「何？」

「さっきのファーストキスだったんだ…、」

「えっ？あー、そう。そうだったんだ…。そりゃ、あれだよ…、ファーストキスってもんは突然なものなんだよ。」

「何それ？」

「俺じゃ不満だった？」

「えっ…？いや…、そんな事ないけど…」

「何なら初エッチもしく？」

「…。」

どうやら福島にはまだ早いみたいだ。

「ジョークだよ。」

「神田君なら…いいよ…。」

「無理するなって！」

「無理してない…、エッチしたら彼女になった実感沸くかもしれないし…。」

そんな理由で初エッチするってどうなの？だけど、俺は15歳の健康な男なわけで、結局俺は彼女の処女を頂いてしまった。

彼女は俺と恋人になった事を、実感出来たのだろうか…？

07 嫉妬心

それからバイトのある日でも陽子とデートするようになっていた。といつてもバイト代もまだ入ってなくお金がないから主に自宅デートだ。そして母親が家にいる時は外に出掛け、手を繋ぎながら街を歩いたり公園に行ったりした。

母親の仕事は日勤の方が多く、大体ウチらは自宅デートになる。始めは色々話しているのだが、途中からイチャイチャしだして、キスして、ボディタッチしてるうちに、エッチする流れになっていく。あれからほとんど毎日会ってるから、すでにエッチは何回もしてる。陽子も俺が求めると拒否らないのだ。いや、むしろ最近は積極的に、体が馴染み始めたみたいだ。

「本当にマナージャーするの？」

「なんで？」

「いや…、帰る時間とかズレるから…。」

「そんなこと言っただって、大介の家って高校からすぐじゃん！」

「まあ…。」

いつの間にか俺達は名前で呼び合うようになっていた。俺的には名前で呼ばれた方が、なんだか心地よいのだ。

俺は親が離婚するのを知ってから、志望校を自転車で通える範囲に変えた。あの学校なら歩いてもう分位だろう。

変えた理由は親の経済的負担を減らし、バイトをするためだ。電

車代も学割が効くとはいえ馬鹿にならないし、家から近いあの学校にして登下校の時間を減らし、確実にバイト出来る時間を確保したかったのだ。

「大介も何か部活入りなよ。できればバスケット入って欲しいけど…、なんか興味無いの?」

「うん。部活に入るんだったら、バイト増やすよ。」

「そっか…、」

「もしなんかの部活入ったら目移りしちゃうかもよ。ウチらの行く高校は女子が多いみたいだし。」

「目移り?」

「そう。あの子可愛いとかあっちの子は綺麗!とか思つかもしれないじゃん!」

「少しヤキモチを妬いて欲しくて言ったのだが、何も言ってこない…、返す言葉が見つからないのかもしれない。」

「冗談だよ。」

「…。」

「おいおい…。」

陽子は今にも泣き出しそうな目をしてた…。それを見て愛おしくなり、引き寄せて抱きしめてしまった。

「陽子…。」

「うん…。」

「好きだよ。」

「うん…。」

まだ陽子から“好き”という言葉は数えるくらいしか聞けてない。けど今は横にいてくれるだけで満足なのだ。

「ねえ…。」

「何？」

「和代への言い訳考えてくれた？」

「あー、それ…。」

正直考えてなかった。でも隠すよりオープンにする事で打開出来ないものか？『付き合う事になったから応援してくれよな！』って、言ってみるか…？それとも付き合っていない振りして『俺、福島が好きなんだけど、相談乗ってよ！』的な感じでやってみるか…。

どっちにしる面倒臭かった。でも少し間違えれば、陽子がイジメの対象になりかねない。親友の好きな子と付き合うというのは、裏切り行為になるだろう。それだけで無視される可能性だってあるのだ。

いっそ直江に彼氏でも出来れば万事上手くいくのだが…。ん…、そうか、誰か紹介すればいいのか…？でも誰を…？

一番始めに頭に浮かんだのがタカだった…。まず、あいつは彼女とかいるのか…？俺はタカとその手の話をしたことがない…。

「ねえ、聞いてるの？」

「ん？ああ、聞いてるよ。ちょっと考えてたら、よく分からなくなつてさ…。そっちは？何かいい案無い？」

「うん…。」

どうやら無いらしい。女の友情って難しいから…。でも彼氏を奪った訳でもなし、深く考えなくても大丈夫じゃないかな…？

「そついえば冴子さん俺達の事なんか言つてなかった？」

「うん…。あー、言つてた。」

「何て？」

「『モテそうだからしっかり掴んでおきなさいよ！』だつて。」

「なんだよそれ。」

「『学校にいる子は先輩でも若い先生でもみんなライバルだと思いなさい！』だつて。」

「それじゃ俺って、すげえ浮気性の男みたいじゃん！」

「そんな事じゃなくて、大介ってモテそうだし…私としても不安だよ…。」

「なんだかな〜。」

なんだか複雑だ。誉められてるような、けなされてるような…。
まあ、彼女なりのヤキモチだと思って、受け流せばいいのだろうけど…。

08 初送信！

「神田さんの息子さん大きいね。」

「体ばかりでなくなつて、中身はまだまだ子供ですよ。」

「大介君だっけ？身長どのくらい？」

「187センチです。」

「187…。最近の子の成長はすごいな。」

入口付近にいたこのおじさんに親父のとこまで案内してもらったのだ。そのおじさんにお礼を済ませ、携帯電話のコーナーに向かうと、

「大介！通信会社はK社の携帯な。ここのが比較的初期費用抑えられるから。」

「分かった。」

親父は慰謝料代わりにあの家と土地の権利を母親に譲った。後の支払いは看護主任をやつてる母親の給料でも払っていけるだろう。あとは俺の養育費だが、それは俺が大学卒業するまで続くそうだと、携帯各社の機能なんて分からない。だからデザインを重視して、あとは音楽を聴くのに特化したメーカーのを選んだ。その後の手続きは、カウンターの若いお姉さんがやってくれた。

そして晴れて15歳にして携帯デビューを果たしたのだ。そして親父と一緒に出口を目指した。

「なあ、大介。」

「うん。」

「カウンターの姉さんどうだった？」

「カウンター？さっき手続きしてくれたお姉さん？」

「ああ。」

「いや、特に不手際はなかったけど…？」

「そうじゃない。」

「じゃ、何？」

「いや、あー、うーん、実はあの子のお腹の中にお前の、弟か妹がいるんだ。」

「えっ？」

「振り向くな！」

そんな事言われても見たくてたまらなかった。いや茶髪でイマドキの子だった。そんなことより、

「あの人いくつ？」

「ん…、22歳だ…。」

「22歳？あつ、えーと、親父って確か今年42歳だったよね。」

「ん…、そうだな…。」

「親父、その年の差は犯罪だよ。」

「そう言っなよ。」

「ちゃんと紹介してくればよかったのに。」

「そうか。いや…、彼女も…、お前から父親取ったから遠慮が多少あるみたいでな…。」

「俺と親父の関係は変わらないよ。」

「ありがとう。大介にそう言ってもらえると助かるよ。」

「産まれたら見に行つていいか聞いておいてよ。」

「分かった。お母さんには余計な事言っなよ。」

「母さんお腹の子の事知らないの？」

「いや、お腹の子の事は知ってる。そうじゃなくてお前が彼女と会った事や、兄弟見に行く約束したとか…。」

「分かった。それは言わないよ。」

「お母さんの事頼んだぞ。」

「この間から何回同じ事頼むんだよ。」

「いや…、そうだな。高校行っても勉強頑張るんだぞ。」

「分かってるって!」

俺はそう言っただけで親父と赤外線番号とアドレス交換した。でも、そのやり方を知らない俺はただ見てるだけ…。そして俺は親父の職場をあとにした。

そして近くのファーストフードで取説見ながら自分で色々いじってみた。バイト先の見竹さんも登録出来た。続いて見竹さんにメールしようとアドレスを呼び出すと、親父と見竹さんの他に“慶子”と登録してあるアドレスがある。なんだ？気持ち悪い。

見竹さんへのメールを一旦止め、登録してある慶子なる人物の情報を試してみようとすると、誰からか分からないがメールを受信したのだ。

親父からか…？と思いつつ受信ボックスを開くと慶子なる人物からで、内容を読んでいくと、どうやら親父の新しい奥さんだという事が分かった。さっき受付しながら登録したのだろう。しかもメールの最後に“今度二人で会って下さい。”と書いてあった。

なんか腹黒い子だったら嫌だなと思いつつ、なんとか返信を送ってみた。そうして見竹さんにするはずだった俺の初メールは、親父の新しい奥さんの慶子さんと終わってしまったのだ。

09 バスケ部女子の現状

俺は入学前だというのに母親と高校に来ていた。校門から一步中へ入ると、結構クラブ活動が活発だとわかるくらい、色々やってるのが解る。だけど男子はテニスコートにいてるだけで、見たところ他には見当たらない感じた。

サッカーをやっているのはどうやら女子だ。女子サッカーか…、全国で何校くらい女子サッカー部ってあるんだろう…？その貴重な一校みたいだ。

バックネットで活動してるのも明らかに野球部じゃなく、女子のソフトボール部のような。

それにトラックを走ってる女の子の数が40人くらいいる。交代で走るのが、それと同じくらいの人数がトラックの脇にいる。でも見た感じ陸上部っぽくない。いったい何部だろう？そんな疑問を持ちながらそれを見てると、

「大介行くわよ。」

「おう。」

そして俺と母親は職員室へと入っていった。目的は苗字の変更の手続きだ。入試の時は前の苗字で受験した。で、今の苗字はというと、母親の旧姓に変わったのだ。

母親いわく“途中から変わるのではなく、入学当初から変わってた方が嫌な思いをしなくてすむ。”という事らしい。でも別に俺まで手続きにこなくてもよかったんじゃない？と心の中で思っていた。

「では入学間際で申し訳ないのですが、よろしくお願いします。」

「大丈夫ですよ。ところで神田君じゃなかった…、若宮君は何かスポーツしてなかったの？」

「えーと、バスケやってました。」

「そうか。実は俺が今年からバスケ部男子の顧問をする予定なんだよ。練習参加のお知らせって手紙行かなかった？」

新学期からこの高校に異動してきた、この綿貫という先生は俺を羨望の眼差しで見てる気がする。

「手紙？あー、あったみたいです。」

少しとぼけてみた。

「休み中は忙しかった？」

「いえ…、高校で部活に入るつもりないので。」

「なんで？勿体ない。お前なら…、」

お前なら？俺はあんたとまだそんなに仲良くないぞ！

「大学だってスポーツ推薦で入れる素質ありそうだけどな。」

昔、空手の道場を辞める時も『勿体ない。』そんな事を言われたような…。ん…？素質？体格だけ見て言ってるのか？

「高校でもやらないつもりですから、上でもやる気なんてないですよ。」

「そうか…。」

「先生質問いいすか。」

「なんだ？」

「グラウンドで走ってる女子って何部ですか？」

「あゝ、あれか。俺も昨日女子バスケの顧問に挨拶行つた時間聞いたが、どうやらバレー部とバスケット部の新入生らしいぞ。体力作りっていうか、ふるいにかけてるのもあるみたいだな。」

「ふるいですか？」

「メインの体育館は2面あって、女子バスケと女子バレーで毎日占拠してるんだ。けどあの人数は入れないからな。」

「ふゝん。えっ？男子は何処で練習してるんですか？」

「一応、古い体育館を使ってるみたいだ。そつちはまだ見てきてないが1面しかコートが取れないらしい。それで、日曜日以外は男子バレーと日替わりで使ってるみたいだ。今週は月水金、来週は火木土って具合だ。体育館が使えない時は、筋トレとか自主トレしてるみたいだけだな。」

「ふゝん。男子は肩身狭いすね。」

「コートに立てるだけいいのさ、女子の3軍は男子の練習の後に1時間練習に来てるらしいし。」

「それまで待機ですか？」

「いや、屋上に金網張ってあるんだけど、そこにリングが4つあってシユート練習してるみたいだ。それでも人数が溢れるから半分は交代で基礎体力向上のトレーニングをしてるらしい。」

なんて環境だ…、好きでこの強豪校に来た子もだろうに、目の目をみないまま埋もれていく子もいるのか…。

それより高校の部活で3軍ってなんだよ？強豪校ってそんなものなのか？

「他の高校行けば即レギュラーの子だっているんでしょ？」

「だろうな。それに比べたら男子は恵まれてるぞ、一応体育館使えるしな。まあ、毎日練習はないし、6時には練習終了だし。」

「俺は応援する方でいいです。」

「そうか。まあ、強要はしないがな。」

直江は大変な環境にいるんだな…。陽子が2日で辞めたのが分かる気がする。3年生が引退した時に、監督の目に止まらないうと、また1年下積みになってしまう可能性が高いそうだ。

その後、母親と綿貫さんが世間話をしていたが、興味のある話はなかった。

俺はボールの弾む音と活気のある声が聞こえる体育館の方が少し気になっていた。

「男子バスケットは今日休みだったみたいだな。」

「あれ？顧問なんですよ？『みたいだな。』なんて、ずいぶんと他
人行儀な言い方するんすね？」

「新任だから入学式が終わってからだ。」

「そっか…、」

この綿貫先生には、高校生活で何かとお世話になるみたいだが、
それはまだ少し先の話…。

10 クラス

俺とタカは下駄箱のあるガラスのドアに張り出されたクラス表で自分の名前を探していた。

新入生の男女比は前年と変わらず1対3らしい。男子80人に対し女子が240人もいるのだ。男子の立場は弱そうだな…。

「1組から4組までは女子だけのクラスだな。」

「そうみたいだな。おつ、タカは7組か。やっぱり出席番号1番だぞ。」

「だな。」

他のクラスをアイウエオ順で見ても、浅野より前の男子がいないという事は、タカの3年間出席番号1番が決定したということだ。

「おい、大介…、お前の名前無いぞ…。」

「あるだろ。」

「どこ？無いじゃん！女子クラスの方に1人でいるとか？」

「あー、タカに言うの忘れてたんだけど、」

「何？どした？」

「いや、どうもしねえけど、先月親が離婚して母方の旧姓に先月から変わったから。」

「はあ？マジ？」

「うん。」

「そつか…、知らなかったよ…。」

「別にお前が落ち込む事じゃねえだろ？」

「それもそうだけど…、で、大介は何組になったんだ？」

「8。」

「8組か。えゝと、大介、大介…、おつ大島と同じクラスか…、あった！若宮大介！若宮になったんだ？」

「神田改め若宮だ。よろしくな。」

「おつ。」

「ところで大島って？」

「堀北中のガードだった奴だよ。」

「あゝあ、あのやたら早くて上手い奴か？」

「そう。あとセンターの加藤覚えてる？」

「名前まで覚えてないけど、顔見れば分かると思うよ。」

「あいつがいるから大介は新入生で2番目のデカさだな。」

そんな情報はどうでもいいけど…。あいつは加藤って名前だったんだ…。

「加藤は俺と同じクラスだな。」

「ふん。ところでタカ、」

「何？」

「男子バスケの新入生は何人練習来てたんだ？」

「あれ？大介入る気になった？」

「違うけど。で、何人？」

「なんだよ…、来たのは3人だけだよ。それがどうした？」

「堀北の2人とタカだけ？」

「いや、俺以外に3人。」

「もう一人は？」

「小船中学ってこの片山って奴。」

「小船中…？聞いた事ないな…、そいつ上手いの？」

「普通かな…。」

タカが普通というくらいだから、タカよりは下手なんだろう…。

「先輩は？何人いた？」

「おーっ、やっぱり入る気になったんじゃない？」

「別にそんなんじゃない、」

そこに1年の担任が職員室から出てきて、教室に向かうところらしく、声をかけてきた。

「おー、お前ら！早く教室に入れ！クラス分らないのか？」

「すぐ行きます。」

よく見ると、昨日対応してくれた綿貫先生だった。

「大介、今日練習1時からんだけど顔出せよ。」

「バイトだからパス。」

「そつか…、伊藤先輩が大介呼んでこいって、うるさくてさ…。今度一回顔出してよ！俺の顔立てると思って頼むよ！」

「伊藤先輩ね…。」

「そう。あと1コ上の前島先輩と谷津先輩。」

「前島か…、ウチの中学のOBばっかじゃん。」

「地元だから、いてもおかしくないよね…。」

確かにそうだが、前島の名前を聞いて尚更行きたくなかった…。前島には空手道場に通ってた頃、特に小学校低学年の時に随分やられたもんだ。まあ、そのお陰で上達したので感謝しているが…。それと2年前の…、

「考えとくよ…。」

「頼んだ。」

そう言っ て俺達は隣り合わせの教室へと別れていったのだ。

11 社交的（前書き）

どうも作者です。読んで頂きありがとうございます。これから主人公大介の高校生活が始まるので、サブキャラが多数出始めます。会話もなるべく少人数（3人位まで……？）にするつもりですが、分かりずらく感じたらゴメンなさい。では本文をどうぞ！

11 社交的

「遅れてすみません。」

小声でそう言いながら教室の後ろのドアから、入って行くと注目の的だった。視線が集まる。俺は一つだけ空いている席目掛けて歩いていった。おそらくそこが俺の席だろう。

「若宮！」

「はい。」

教壇に立っている、おそらく担任であろう人に名前を呼ばれ、そっちを見ると昨日対応してくれた綿貫さんだった。

「綿貫さん…、」

「お前が最後だぞ！」

「すみません。」

「早く座れ。」

「はい…。」

廊下側から男女交互の列になって、全部で6列あり、案の定俺の席は唯一空いてる、窓から2列目の1番後ろの席だった。なんか一番後ろの席をゲット出来たのは嬉しかった。苗字が変わらなかつたら、おそらく中途半端な席だったに違いない。

教壇では担任の自己紹介のあと、入学式の簡単な流れを説明している。途中から7組と8組の副担任をしている平戸先生の話をしたが、その方はまだ隣のクラスにいるようだ。

そして『時間になったら放送があるので、その指示に従って体育館に来るように。』と言って綿貫さんは出て行った。

みんな緊張からか誰も喋らず静かにしている。そんな中、隣に座っていた女子に話かけられた。

「あゝ。」

「俺？」

「はい。」

「なんでしょ？」

「あなたってバスケやってませんでした？」

「はあ…、やってたけど…、」

「ですよ。あのっ、私、北見中学でバスケやってた渡辺っていいです。」

「どうも、若宮です。」

「いやゝ、そうですか。ここの高校でしたか…。」

「俺って…、」

『俺って県内のバスケ会だと有名なの？』って聞こうとして止め

た。だけど、この渡辺さんは、

「はい。有名でした。」

「そう…。」

「なんていっても、中学の公式戦でダンクしてる人なんて、県内で1人しかいませんから。」

「そうゆうこと…、」

確かにウチらの試合はギャラリーが多かった気がする。それにダンクの度に歓声が上がってたし…、ダンクを見たかったのか…。

「同じクラスで、しかも隣の席なんて光栄です。」

「はあ…。」

回りをよく見ると、誰も話して無い中で、話し出したウチらに、クラス全員が聞き耳を立ててるようにも感じた。

それを遠くで聞いてた人物が、痺れを切らしたらしく自分の席から俺の席へとやってきたのだ。みんな座ってる中、立ち上がったのだから普通に目についた。

「あのさ…、」

見た事ある…。こいつがタカが言ってた大島か…？

「はい？」

「あーっ！」

この渡辺さんはいちいちうるさい。

「あなたは堀北中学の大島君じゃないですか！」

「どうも。でも、もうあなたと同じ高校生だよ。」

「すみません…。」

「浅野に聞いたんだけど、バスケやらないんだって？」

大島と視線が合う。どいつもこいつも馴れ馴れしい…。社交的って言った方がいいのか？

「そうだね。そのつもりだけど。」

「えー！なんで勿体ない！」

渡辺さんはいちいちアクションしなくてもいいのに…。

「一緒に全国目指そうぜ！」

全国？週に3日くらいしか活動しないクラブが？そんな簡単じゃないだろ！

でも全国つてのは、いい響きだ。堀北に勝つてたらおそらく俺らが、全国大会への切符を手にしてたに違いない。あの試合が事実上の決勝だった。

「ウチの学校からじゃ無理だろ。圧倒的に女子部の方が優遇されて

るし。体育館使える日も限られてるんだろ？」

「詳しいな。それってバスケに未練あるからか？」

チツ！この大島って野郎は俺を煽ってるのか？嫌な野郎だ。

「かもな。でも俺は君達が全国行けるよう応援する方に回るよ。」

「神田の力が必要だ。」

「な…？」

誰かに『必要だ。』なんて言われたのは初めてだった。

「バスケやるように考え直してくれよ。神田の力が…、」

「人違いじゃないか？俺の名前は若宮だ。先生もそう言ってただろ？」

「あれっ…？いや…、だってお前は…、」

「えー違うの？ダンクしてた人にそっくりだけど…、」

渡辺さんは、ちょいちょい会話に入ってくる。いや、先に話していたのは俺と渡辺さんだった。

「そうか…、人違いか…、いや…、名前を覚え間違えてたかな…？」

タイミング悪い事にそこにタカが入ってきた。しかも後ろには俺と変わらないくらいデカイ奴もいる。堀北のセンターだ。こいつは

マッチアップしたから、なんとなく顔を覚えてる。

「大介！」

大島がタカを見て、

「あつ、浅野に加藤！いいところ来た！」

それであつさり俺が“元神田”という事がバレてしまった。それにいつしか俺達の席の回りには、このクラスの女子バスケット部員まで集まり出していた。なんだ？俺の机はお前らの交流の場じゃないぞ！

12 入学式

つまらない……。校長と来賓代表の挨拶が終わったあと、担任と副担任の紹介があり、簡単な自己紹介が始まったのだ。そして綿貫さんの番がきた。

「只今、紹介に与りました8組の担任をさせていただきます綿貫と申します。教科は保健体育になってます。私もこの4月から、この高校に移って来たばかりで、分からない事もありますがよろしく願います。あと男子バスケ部の顧問も担当する事になってます。」

と、さつき教室で話した内容となんら変わらない感じだった。副担任の平戸さんは今年2年目の美術の教師だ。

俺は選択教科の音楽・書道・美術の中から、この副担任の美術を選択している。平戸さんが転勤しない限り、3年間この人に美術を教わるのだ。

さつきの挨拶の時は全員立っていたのだが、女子が多いのもあってか、俺は頭一つ出ている。あくびでもしようもなら目立ってしかたないのだ。それはあの加藤って奴も同じだ。高校1年で180センチ後半なんて、スポーツをするには恵まれ過ぎだ。でも俺はそれを放棄するつもりなのだ。

他にもそこそこデカイのは何人かいるのだが、ウチらほどではない。ちよつと気になったのがタカのクラスの女の子だった。俺らほどないが180センチは確実にありそうだ。

まあ、最近の全日本の女子バレーボールをみても、このサイズの日本人女性をみる事は珍しくないから別にいいのだが、流石に近くで見ると俺でも威圧感を感じる。中学の県大会で見た事がないから、バレーか他のクラブだろう。

「若宮君。」

なんでこの渡辺さんは話好きなんだろう……？目立つ俺が喋ると、先生に目を付けられるから嫌なんだけど……

「何？今じゃなきやダメな話？」

「え？あー、うんとね。」

この子は俺の気持ちを汲み取ってくれない……、この怒りは、どこにぶつけたらいいんだ！

「隣のクラスの背の高い女の子いるでしょ？」

「ああ。」

「あの子、他県で有名だった子なんだよ。」

他県？有名？

「なんで？」

「全日本候補に入って、選考合宿に行った経験あるんだって！」

確かに全日本の女子バレーは、たまにサプライズ的に若い子をメンバーに入れてくる。実力があれば入れても別にいいだろう。それに将来的に育てたければ、レベルの高い環境を与えるのも必要だ。

「すごいね。」

「でしょ？多分ウチのバスケ部でも1年からレギュラーいけるんじゃないかな？」

「えっ？バス…、」

思わず大きい声を出してしまった。間髪入れずに『そこっ！静かに！』と、どこから声が上がってくる。

絶対、注目されてる。生徒達からの視線は別にいいが、先生達からの視線が痛かった。陽子にも見られたかな…。格好悪いな…。

式も終わり教室に戻るのに、ウチら8組は最後に体育館を出る事になり、そうなると1番最後に体育館を出る新入生は、俺と渡辺さんだった。

新入生退場の時に陽子を探したら、意外と早く見付かって1組だった。陽子の何人か前には直江の姿も有り、どうやら同じクラスらしい。その後も人間観察をしていくと、チラホラ可愛い子や綺麗系の子が目についた。

そして『7組起立。』となつて、あの子に視線をやると意外と綺麗な顔立ちだ…。線も細い…。いや、化粧をすればモデルでも出来そうな感じた。

「綺麗だよね…。」

横で渡辺さんが呟いてる。同性の彼女からみても、男の俺と同じように感じるみたいだ。

「8組起立！」

ようやく退屈な式から解放されたのだ。

13 有紀姉

俺は家から学校が近い事もあって、どうもぎりぎりで家を出る傾向にあるみたいだ。タカといえ、朝からシユート練習をしに行くとかで、一緒に登校するのは昨日だけで終わるらしい。俺的にはその方が気が楽でありがたい。

教室の前まで着くと、廊下で話してる生徒が結構いる。上履きの色を見ると上級生が半分くらいいるみたいだ。この学校は上履きの色で学年を区別してるのだ。

席に着くと渡辺さんに話しかけてきた。なんでも、上級生が自分の中学の後輩を中心に、部活の勧誘に来てるみたいだ。

「成る程ね。」

「そういえば、さつき『神田君いない?』って男バスのマネージャーが探しに来てたよ。」

「マネージャー?」

「そう。他の部も勧誘しまくってるよ。廊下に結構人いたでしょ?」

「あー上級生っぽい人達のこと?」

「うん。それに多分だけど、マネージャーの中でも1番可愛い子連れてきてるんじゃないかな?」

「可愛い子?」

「新入生1人に対して、その中学の先輩と可愛い系のマネージャーが1人は来てるよ。」

「えっ？そうなの？」

色仕掛け？高校生の発想じゃないな…。

「そうだよ。あの後ろのドアから見える人達って、坊主頭だから野球部だろうけど、あのままだと入部決定だよな。」

「野球部あるんだ？」

「みたいよ。活動場所は校内じゃなくて、運動公園の球場借りてるみたいけどね。」

「へー。野球部って9人以上いるんだ。」

「いないから勧誘してるのかもよ。」

「そっか、そうかもね。」

「あっ、又来た！」

「ん？何が？」

「さっき言ってた男バスのマネージャーさん！」

「マジ？」

そう言って入口の方に振り返ろうと思ったが、俺は渡辺さんの方

を向いたまま振り向けなかった。

「入ってきた。」

「嘘？」

「こつち来てるよ。」

「…。」

すでに後ろに気配を感じた。俺は口パクで“いる？”と渡辺さんに聞いたら、静かに頷いた。意を決して振り向くと、俺のよく見知った懐かしい顔が立っていた。

「大介探したよー。しかも苗字変わってるとは思わなかった。浅野に確認しに行っちゃったよ。」

「久し振り…。」

「そうだね、久し振りだね。」

俺の1つ上の先輩で、お互いの初めての相手…。要は、俺のファーストキスも俺の童貞も捧げた相手がこの人なのだ。付き合ってたわけじゃないけど、ノリで何回かしてしまった…。

言い訳するわけではないが、始めに誘ったのは有紀姉の方からだった。バージンから早目に卒業したい年齢だったのかもしれない。

当時有紀姉は、ウチの隣のアパートに住んでいたが、有紀姉ん家が近くに建て売りの物件を買ったとかで引越したのだ。

母親同士が古くからの友達で、更にお互い看護師で職場までもが一緒だった。それでどちらかの母親が夜勤でいない時などは、お互

いの家に夕飯をご馳走になったりしていたのだ。

「春休みの練習スケジュール表入った手紙行かなかった？」

「きてた。でも俺がやらない事タカから…、浅野から聞いてるんだろ？」

「本気でやらないつもり？」

「まあ…、」

「やりなよ。伊藤先輩も楽しみにしてるよ。」

「…。」

「谷津も前島もいるし。」

また前島の名前が出た。でも、そのうちきつと顔合わすよな…。
出来れば見たくなかった。

そこに担任の綿貫が出席を取りにきて『お前ら席に着け。』と
言ってる。

「大介また、来るから。」

そう言つてドアに向かって行くと、手前で振り向いた。

「入んなきゃダメだからね！」

そう叫んで出ていった。タカから入らないって事は聞いてるだろ

！って叫び返してやりたくなかったが、『起立』の聲がかかり止めた。

「あの先輩と仲いいの？」

「うん？」

「いや、タメ口だったからさ…。」

「ああ、昔近所に住んだ。」

「幼なじみみたいな感じ？」

「そうだね。」

そこは当然濁しておいた。幼なじみは幼なじみなんだろうけど“エッチした仲”なんて言える訳ない。

ん…？待てよ…、有紀姉が男バスのマネージャーって事は、今の彼女の陽子と一緒にいるって事？もしかして女同士だと仲良くなったら喋っちゃう？ヤバイかな…？有紀姉に喋らないように口止めしない…。

14 相談相手

入学前の俺の携帯電話のメモリーは、両親と陽子と見竹さんに店長、それと親父の新しい奥さんの慶子さんの6件だけだった。

それがタカに教えたばかりに、有紀姉を始め男バスメンバーからの勧誘メールが度々入ってくるのだ。伊藤先輩と堀北中出身の大島と加藤からもくる。不本意だが、誰からのメールか分かるようにこのメンバーも登録する事にしたのだ。

あとのクラスメイト数人とも交換している。その赤外線で情報交換する度に、横に座ってる渡辺さんも交換したそうにしてるのだ。でも向こうから言ってこない限り、俺の携帯に渡辺さんの電話番号が登録される事はないだろう。

「よし、お前らもたまたするな！」

「はい…。」

4月の体育の授業は短距離のトラック競技だった。100メートル走と110メートルハードル、それに走り幅跳びの記録を計るというのだ。

ウチのクラスは隣の7組との合同での体育なので、タカも一緒に授業を受けてる。

「大介！俺と勝負しようぜ！」

「長距離だと勝てる気しないけど、短距離じゃ、負けねえよ。」

「よし！だったら一つでも俺が勝ったら、バスケット部入れよな！」

「なんでそうなるんだよ？こつちが勝ったら、なんかメリットあるわけ？」

「うーん…、名誉…！？」

「そんな勝負乗れないね。メリット一つない賭けに乗る奴なんていないよ。」

「負けるのが怖いんだろ？」

「タカ…、今のお前って、小学生並だぞ…。」

「うつ…、」

中学時代の3年間、3つの競技で同じ年の陸上部よりいい記録を出し続けた俺は、学年トップのポテンシャルの持ち主だった。だからタカに負ける気など全くなかった。

「だったら、ウチの加藤が大介に勝つ！」

加藤か…。体格的には俺と変わらないが、俊敏性はどうなんだろう？ジャンプ力だけとはにかくあるのは間違いないけど。

「俺なら遅いぞ。」

横にいた加藤があっさり言ってしまった。タカが残念そうな顔をしたのは言うまでもない。

女子の体育はハンドボールみたいで、トラックの方じゃなく、狭い方のグラウンドでゲーム形式でやっていた。中でも目立つのが、あの背の高いモデル系の女の子だ。

渡辺さん情報によると、1年生で唯一1軍に抜擢され、それどころかレギュラーメンバーに選ばれたらしいのだ。全日本の選考合宿に参加するくらいなんだから、そのくらい当たり前だろうけど…。

「大介。何見てんだ？」

「ん…？」

「女の尻か？」

「お前と一緒にすんなよ！」

「見てねーし！」

「そうだ！タカって彼女いるのか？」

「なっ、なんだよ突然！？」

「何びつくりしてんだよ？世間話だよ。世間話。」

「突然そんなの聞かれたらびつくりするだろうが！」

「タカさー、お前を男と見込んで、あとで相談あるんだけど、時間作ってくれない？」

「ん？えっ？まさかお前、好きな子でも出来た？」

「違うよ。後で話す。」

「分かった…。」

的違いで残念そうだったが“男と見込んで”ってフレーズが効いたみたいで、なんだか誇らしげだ。

勝手にアドレスを教えた事を怒ろうとか、そうゆう事ではなく、棚上げのままのあの問題について、一役買ってくれないかの相談だった。

この日は俺のバイトが休みで、男子バスケット部が体育館を使えない自主練の日なので、放課後タカにはウチに来てもらった。

「で、なんだ相談って？」

「タカは好きな奴とかいないの？」

「まさか！？大介って、そっち系だったの？」

「そっち系？」

「いや…、男が好きって奴？つまり俺が狙われてる…？」

ブッ！俺は飲みかけたコーヒーを口から少し嘔いてしまった。

「馬鹿か！？そうじゃねえよ！腹割って話せない奴に、相談するのが嫌だっただけ…。だからちよつと試したただだよ。」

「たっ、試すなよ！」

「悪かった。で、いるの？いないの？」

こんな感じで言われたら、いくらタカでも言うだろう。

「大介はどうなんだよ？」

「だから、それを相談するためにタカの腹積もりを聞いてるんだろ？」

「うつ…。」

口が軽いこいつからは、質草を取っておくに限る。さあ、タカ言っ
てしまえ！

15 タカの好きな人

タカはゆつくりと自分の好きな子の事を話し始めた。

「誰にも言っなよ。」

口の軽いタカに言われたくない。

「分かった。」

「前に、直江が大吉の事好きなのは話したよな。」

「うん。」

「そもそも、なんでそんな話を俺が知ってたかっていうと、前から直江に少し興味あって、どんな奴がタイプか知りたかったから、抽選会の時聞いたんだよ。」

「じゃ、タカは直江なんだ？」

「う…、まあ、そうなんだけど…。だけど、話していくうちに直江が『実は神田君みたい人がタイプなんだよね。』って言うわけさ。それって残酷じゃね？」

「そうか…。でも『タイプ』って言っただけで『好き』って言った訳じゃないんだろ？」

「同じ事だろ？」

「ん…、」

「えっ！？まさかお前、この間俺があんな事言っただから、直江の事
気になりだしたとか？」

「違うよ。」

この展開なら話してもいいか…。

「そんな全力で否定しなくてもいいじゃん…。」

「悪い…。実は俺、この間から福島陽子と付き合いだしたんだ。」

「えっ！えーーーーーっ！」

「そんなに驚く事ないだろ？」

「いつ？いつから？」

「いつからって、タカが春休みにウチに来ただろ？」

「うんうん。」

「あのあとくらいからだよ。」

「マジ？」

「マジ。そこで相談なんだけどさ、直江に上手く言って欲しいんだ
よ。」

「上手く？」

「そう上手く。いや、だから陽子も女同士で誰がタイプみたいな話してみたいで、直江が俺みたいのがタイプって言ったの聞いてた訳じゃん？」

「まあ…。」

「だから陽子も直江に対して気まずいわけよ。」

「気まずい？」

「だから…、もしタカが好きって公言してた子を、友達が搔っ攫ったら嫌だろ？」

「だな…。」

「それと同じだよ。」

「うゝん。断る！」

「なんで？」

「大介、よく考えてみるよ。俺だったら第三者に聞くより、友達本人から言われた方が気持ちがいいけどな。それに、言えないってのは友達じゃねえよ！」

「うつ…、確かに…。」

「だろ？時間がある時に、福島から直接直江に言った方がいいよ。」

「うん…、分かった…。」

「でもあれだな、お前と福島が付き合うとはね…。」

「なんだよ。悪いかよ?」

「なんて言って告った?」

「いや、普通に『俺と付き合わない?』的な感じだよ。」

「ふん。でも彼女が…、いいな。」

「直江に告白すれば?」

「俺が?」

「他に誰がいるんだよ?」

「嫌だよ。」

「何で?」

「そりゃ…、あいつはお前の事が好きだったんだぜ? いや、今でもそうだろうし…。」

「俺には彼女いるし。」

「まあ、そうなんだけどさ…。」

「そうだ、今度ダブルデートするか？」

「はぁ？やめてくれよ。」

「何で？きつかけあつた方がいいだろ？」

「ん、うん…。」

どうやら内心では、きつかけが欲しいらしい。

「よし、直江に俺と付き合ってる報告したら、そうゆう方向に持っていくから、心の準備しとけよ。」

「わっ、分かった。」

「ちゃんと分かったのか？告白するんだからな？」

「なんでそうなんだよ？」

「いいじゃん！二人きりになるタイミング作るからさ。」

「マジかよ…。」

「まっ、告る告らないはタカの自由だけだな。」

「う、うん…、考えとくよ…。」

「あー、そうだ。俺達が付き合ってる事は、陽子が直江に話すまで絶対内緒しといてくれよ！」

「ん？」

「もし喋ったら、お前が直江を好きな事を言い触らすからな！」

「分かったよ。言わねえよ…。」

「よし。」

直江には陽子に直接言わせる事にして、あとは有紀姉の方だな…。

16 有紀姉の噂

「いらっしゃいませ！」

駅前という事で、このコーヒー屋はそこそこ繁盛してる。仕事中は中々雑談をする暇がないのだ。それでもたまには間が開く事もある。

「見竹さん、聞いていいですか？」

「何？」

「この間言ってた、店長がちょっかい出してるって、どの娘ですか？」

「そんなの聞いてどうするの？」

「いや、別に聞いてみたかったです。」

「知らなくてもいいんじゃない？」

「もしかして複数いるんですか？」

「まあね。」

「マジですか？」

見竹さんが頷いてる。

「神田君…、じゃなかった若宮君、無駄口叩いてる暇あったらダスターでテーブル拭いてきて!」

「はい…。」

「あとダストボックスの中も見て、一杯だったら新しいのと変えてきてね。」

「はい…。」

ていうか、教えてくれてもいいじゃん…、別に店長本人がいるわけでもあるまいし…。ん…、まさか今いるバイトの中にその相手がいるとか…?今いるのは新田さんと…冴子さん…。

もし冴子さんに手を出したら、店長でも半殺しにしないとダメだな…。

そこに自動ドアが開いたので『いらっしやいませ。』と声をかけたら、俺の知ってる顔だ。

キョロキョロと辺りを見渡すと、俺を見つけて近寄ってきた。

「大介!話って何?」

「明日言うつて言っただろ?」

「メールでね。でも気になるじゃん?」

「今、バイト中だから。」

「何時に終わるの?」

「10時。」

「まだ3時間以上あるじゃん！しかもそんな遅くまで待つてらんないし。」

「終わったら電話するよ。」

「ん、別に明日学校でもいいけど。」

そんな不特定多数がいる場所じゃ無理だ。それに、なるべく二人の状況がいい…。

「あ、冴子先輩。」

「あつ、おい。」

しまった。二人は男子バスケのマネージャーの先輩後輩の仲だった。

何やら『久しぶりです。』的なやり取りをしている。その二人の中に入る事も出来ず、俺はダストボックスのビニール袋の交換を急いで仕上げた。

そして、ゴミ袋を店の裏の所定の場所に置き、店内に戻ると有紀姉は帰ったらしく、すでに見当たらなかった。

「さっきの子、彼女？」

「ちつ、違いますよ。」

「あらそうなの？でも『大介』って下の名前で呼んでたよ。」

「昔近所に住んでて、ガキの頃よく遊んだんですよ。」

「ふん。」

「もしよかつたら見竹さんも『大介』って呼んでもらっても構わないですよ。」

「私の立場で出来るわけないでしょ!？」

「そうですか…。」

見竹さんは意外と堅い人なのか？

冴子さんとシフトが同じ日は、決まって一緒に帰るのが習慣になりつつある。大学生の冴子さんの服装はカジュアルな感じで可愛くまとまってる。金がなくて、私服の少ない今の俺は学生服姿だ。

「ねえ大介君。」

いつの間にか、俺の呼び名は苗字から名前へと変わったのだ。おそらく陽子が自宅で冴子さんと話す時に『大介』と呼んでいて、それが耳慣れたのだろう。

「なんでしょ？」

「有紀ちゃんと仲いいみたいね？」

「えっ？まあ、幼なじみみたいものですから。」

「そうなの？」

「いやだな…、なんすか？」

「いや、あの娘、色目使うの上手いらしいから。」

「色目？」

「うちらの中では小悪魔的存在だったのよ。」

「小悪魔ですか？」

「私の友達が、あの子に彼氏取られたって言ってたし、他の子なんかは取られてなくても一回あの子と寝たとか、色々噂になっててさ…。」

「マジで？」

「取ったって言い分は、ちょっと違うか…、結局アプローチしてくのは男の方だもんね…。」

「…。」

「でも私の友達は『あの子に彼氏取られた』って確実に言ってた。あとは『またあの娘じゃない？』みたいな噂話だし…。」

有紀姉がそんな尻軽女みたいに言われてるのは、なんか嫌だった。それは本当なんだろうか…？

「大介君。」

「はい。」

「陽子泣かせるような事しないでね。」

「もちろんです。」

泣かせるようなことはしないつもりだ。だから有紀姉にも余計な事を喋らないように、口止めするつもりでメールしておいたのだ。それにしても有紀姉がそんな風に言われてるなんて、大丈夫なのか…？

17 確認の電話

「もしもし有紀姉？」

「大介遅いよ！待ちくたびれたよ。」

「悪い…。」

「で、話って？」

「あのさ、冴子さんの妹の陽子の話なんだけどさ。」

「陽子ちゃん？陽子ちゃんがどうしたの？」

「実は今、俺と付き合ってるんだ。」

「…。」

「もしもし？有紀姉聞いてる？」

「あー、聞こえてるよ。そうなんだ。陽子ちゃん可愛いもんね。」

「でさ、俺達の事言っていないよね？その…、なんて言うか…、昔…、エッチしたとか…体の関係があったなんて…、」

「バツ、バカ！言うわけないでしょ？いくら同じ部活のマネーじゃーっていつても、まだそんな事言いあえるほど、打ち解け合ってなわよー！」

「よかった…、って打ち解け合ったら言つのかよ!？」

「言わないって!いちいち揚げ足とらないでよ!」

「わっ、悪い…。」

「でも、そんな事心配してたんだ？」

「そりゃ…、付き合い始めたばかりだし、余計な心配かけたくないしさ。」

「男だねえ…。」

「それと、ちよつと事情があつてまだ付き合つてる事公表してないから、しばらく黙つててくれないかな？」

「…。」

「有紀姉?聞してる?」

「黙つてて欲しかったら、バスケ部入りなよ。」

「脅すなよ。俺の知ってる有紀姉は、俺が入部しなくても裏切るよ
うな奴じゃないだろ?」

「…。」

「有紀姉?」

「分かったわよ。」

「そう。よかった。そうだ有紀姉は今彼氏いるの？」

「…。」

「おーい？有紀姉？」

「あ…、あのさ…、そのうち大介も耳にするかもしれないから先に言っておくけど、私って『魔性の女』って言われてて…、」

「魔性の女？小悪魔じゃなかったのか？でもそんなに変わらないか…？」

「なんていうか…、」

「俺は誰かに何か聞いても有紀姉を信じるよ。」

「大介…。」

「言わなくていいよ…、たとえば、有紀姉が不倫してようが、二股三股してようが、援交してようが、俺は有紀姉の味方だから。」

「なっ…？」

「ん…？言い返さない…。普通なら、ここは否定するよな…、って事はどれかは当たってるって事？まさか“味方”って言葉に感動してるのか…？」

「ありがとう大介。でもバスケ部には入りなよ。」

「だから、入らないって!」

「いいの? そのうち陽子ちゃん、誰かにやられちゃうかもよ。」

「えっ!? 何それ? 誰かに言い寄られてるとか?」

「はつきりは分からないけど、あの様子だと、相当気にいってるね?」

「1年?」

「前島。」

「まえっ!」

前島の野郎…。

「陽子ちゃんって可愛いから、前島じゃなくても声かかりそうだけどね。」

「他にもいるの?」

「どうだろ?」

「…。」

「大介が入部して守ってあげなよ。」

「陽子辞めさせる。確か今月一杯は仮入部期間だよな?」

「本人が辞めないって言ったら？」

「その時は…、」

「別れるのは選択肢にないんでしょう？なら入部だね。」

「…。」

「みんな待ってるよ、大介が入ってくるの。」

「…。」

「大介？」

「陽子に聞いて、辞めないって言ったら、バイト先に相談してみよ。」

「そこなくちゃ！」

くそー。前島の野郎だけには指一本触れさせねえ！

それで電話は切ったのだが、結局有紀姉に彼氏がいるのかいないのかを聞きそびれてしまった…。

18 賭けの対象

俺は入学してから10日もしないうちに、入るつもりになかったバスケットに入る事にしたのだ。とても不本意…。

有紀姉の電話を切ったあと、直ぐさま陽子に電話して『男子のマネージャーじゃなくて他の部活に入れよ！』と、時間かけて説得したが、結構頑固で辞める気がないそうだ。

「バスケットに携わってたくて…。」

女子部のマネージャーは、選手を2日で辞めたこともあってやりたくないそうだ。で、結局俺がバスケットに入るはめに…。ただし、バイト優先という条件付きで！

それと直江には、俺と付き合いだした事をちゃんと報告出来たみたいだ。

「向こうから告白してくれたんだったら、仕方ないかな…。でも、おめでとう！よかったじゃん！」

と同時に俺の事を諦めてくれたらしい。でもタカとのダブルデートの話は言っていないようだ。まあ、話の流れからいうと無理だよな…。

「あれっ？若宮君今日荷物多いね？」

「ん…？ああ、そうだね。」

「これってバツシユのケースじゃない？」

「ん？ああ、そうだけど…。」

渡辺さんは結構目ざといのか、なにかと指摘されることが多い。

「って事はやっぱりやる気になったの？」

「たまにね。運動不足解消程度に。」

そこに時間ぎりぎりで教室に入ってきた、大島が近寄ってきた。こいつもタカ同様、朝練でシュートでも打ってるのか？

「おー、若宮！とうとう入る気になったか？」

俺がバツシユのケースを持つてるのを目ざとく見付け、俺の肩を揉みながら嬉しそうにそう言うのだ。

「大島痛いよ。」

「おつ、悪い悪い。で、入るんだよな？バスケ部？」

「まあ、家庭の事情もあるから、バイト優先ではあるけど、それでもよければ入ろうと思ってる。」

「よし！認める！そうか、入ってくれるか。」

俺の言葉を聞いて、大島がメールを打ち始めた。

「おい、大島、誰にメールしてんだ？」

「えっ？誰につて…、みんなに…、」

「みんな？」

「みんなに一斉メールだよ。」

「いや、だからみんなつて誰？」

「浅野に加藤に片山、桜井、中西。」

片山までは聞いた事あるな…。

「このあとはに柏木先輩とかにも送る予定だし。」

「何人に送るんだよ？」

まったく…、そう思つて、ふと渡辺さんの方を向くと、渡辺さんまでメールを打ちまくつて…。もしもし、渡辺さん…？あんたは誰に送信してるの？

そして、隣の教室のドアが乱暴に開いた音が聞こえたかと思つたら、廊下を走る音がして、ウチの教室の後ろのドアからタカが入ってきた。

「大介！お前つて奴は！」

どうやら大島からのメールを見たタカが、事の真意を確かめにきたようだ。

「よう、浅野！あとで千円だからな！加藤にも言つておいてくれよ

「！」

「ん？千円？」

「もしかしてお前ら俺が入部するしないで賭けてたんか？」

「ん…、まあ…。でも入ってくれるんだろ？」

「まあ…、」

「だったら千円なんて痛くない。」

「っていうか、大島以外は誰が勝ったんだ？」

「なんで？」

「いや…、俺のお陰で勝ったんだから、学食でA定食くらい奢ってもらおうかと思って！」

「あー、もちろん奢るよ。1年は俺の一人勝ちで、先輩方は先輩方でやってるはずだけど、多分柏木さんの一人勝ちのはずだよ。」

「有紀姉？あんにやる！」

「今月中に入部してくれなかったら、俺は5千円マイナスだったから、危なかったよ。ありがとな若宮。」

「それより本当に入部するんだよね？」

「だからバイト優先だけだな！」

「よっしゃ〜！」

「浅野、そんな喜んでいいのか？」

「何が？」

「先輩方に『本人が入らないって言ってたから、絶対固いです。』とか言ってたじゃん！ガセネタつかまされたって、練習でしごかれるんじゃない？」

「ゲッ！」

それはないだろうけど、結構言われるのは間違いない。

それより久々にボールに触れるからか、放課後になるのが待ち遠しかった。

19 初顔合わせ

「1年8組若宮大介入ります。」

「おつ、大介待つてたよ。」

「失礼します。先輩ご無沙汰してます。」

「そんなとこいないで中入れよ。」

「はい。」

部室を見渡すと伊藤先輩と谷津先輩と前島の糞野郎がいた。他にも知らない顔が何人かいる。1年もいるみたいだ。

「お前ん家、親離婚したんだって？」

「はい。ですからバイトして家計の負担減らさないといけないんで…、」

「聞いてる。バイト優先だろ？」

「はい。」

「それでいいよ。」

「すみません。」

「ただし、公式戦だけはちゃんと来てくれよな？」

「はい。それはもちろん。」

「今日から参加するんだろ？」

「はい。よろしくお願いします。」

「おう。ロッカーは空いてるところ使ってくれ。」

「はい。」

「一応紹介しとくと、3年が俺と大迫。」

「よろしくな。」

大迫さんは温和な感じの人だ。

「よろしくお願いします。」

「2年は…、前島と谷津は知ってるよな。」

「はい。」

「あとは幽霊部員みたいなので、試合の時とか、気の向いた時にしか練習に来ない高橋ってのがいるんだけど…、おい前島！」

「はい。」

「今日、高橋出るって言ってたか？」

「いや、聞いてないです。でも多分バイトじゃないですか?」

「そうか…。1年は…、浅野!」

「はい。」

「1年とマネージャーはお前があとで教えておけ。」

「分かりました。」

「なんか質問あるか?」

「2、3年生は全部で5人ですか?」

「そうだ。試合になったら退場出来ないから、3月まで大変だったよ。」

酷いチーム状況だな…、

「そうですか…。」

「あとは無いか?」

「質問じゃないんですが、いいですか?」

「おっ、なんだ?」

「実はマネージャーの福島と付き合ってます。」

「何?」

回りにいた人間は、一瞬何が起きたか分からない感じで、時が止まった様に静かになった…。着替えの手を止めた奴さえいる。

「本当か？」

「はい。一応報告です。」

「みんな聞いたか？カップル1号な！」

「マジかよ…。」

「どうした前島？」

「えっ？いや、なんでもありません。」

「そうか。じゃ、とっとと着替えて体育館行くぞ！」

「はい。」

前島はガチでがっかりしてた。それにしても先輩方は、中学卒業後そんなに身長が伸びてないのか、俺より10センチ以上低かった。これじゃ、やっぱり弱いよな…。

体育館に向かうと、中からダム…、ダム…、とボールの弾む音が聞こえる。

「マネージャーが先来てるの？」

「いや、違うと思うよ。」

「じゃ、誰？さっき言ってた高橋先輩とか？」

「それも無いな…。」

それ以上聞くのを止めた。行ってみれば分かることだ。
そしてそれが顧問の綿貫さんだと分かった。

「おー、お前ら遅いぞ！」

「バスパンなんか履いてどうしたんですか？」

「ん？俺も一緒に体動かそうと思って。」

「マジすか？先生いくつすか？」

「馬鹿にするな！まだ29歳だ。まだお前らに負けないくらいには動けるぞ！」

「ケガだけはしないで下さいね。」

「だな。」

「先生上手いすか？」

「んー、高校時代は上手いと思ってたよ。」

「『高校時代は』って、微妙な言い方ですね？」

「大学で鼻へし折られたよ。体力も自信あつたけど、上には上がいるってね。」

「そうなんだ…。」

「加藤もデカイけど、やっぱり若宮もデカイな。」

「先生、コイツ準決で俺らに負けたくせに、最後の大会、得点王だったんですよ。」

「ほお…っ。1試合少なくて得点王はすごいな。」

「その試合でマークしてたのが加藤なんですけど、若宮一人に40点以上やられたんですよ。」

「そうだったけ？」

「嫌な事思い出させるなよ。」

横でバッシュを履いてた加藤が暗くなつてた。

「若宮のワンマンチームだったのか？」

「いや、もう一人。外から入れる奴がいたんですけど…、えーと…、あつ、あそこでマネージャーと話してる奴です。」

「浅野か？」

「奴のスリーは凄いすよ。かなり遠目からでも打ってきますし、そ

れにモーションが早い。」

「それは何度か練習見てるから知ってる。でもお前達が勝ったんだろ？」

「まあ、ウチは若宮のこと違って選手層厚くて、みんな平均的に点取れてましたし、俺のポジション以外は身長上回ってましたから。」

「ミスマッチか。」

「はい。」

俺やタカはあまり身長差は気にせずプレーしてたが、他のポジションは辛そうだった。

いつしかマネージャーも全員揃ったみたいで、その中に有紀姉や陽子もいる。

練習は、軽いランニング、ストレッチ、パス練、ランニングシュート、スリーメン、3対3と過ぎていった。その頃女子の顧問とあのスーパー女子高生がやってきた。なにやら綿貫さんと話してる。そのあと伊藤先輩も呼ばれた。

「おー、集合。」

伊藤先輩の掛け声に、3対3を止め先生達のいるところへと集まった。

「5対5のゲームな。で、この子も参加する事になったから。」

男子の練習に参加？確かにバスケの上達の近道は、自分より上手な奴らと練習することだ。特に自分より上手い奴と1対1をするのと…。

おそらく負けるであろうが、そこから何かを感じて学んでいく事が大事だ。始めはその人のプレーを真似するだけでもいいのだ。

「自己紹介してもらっていい？」

「はい。1年の松本です。ポジションはセンターです。よろしくお願いします。」

「はい。よろしく。」

「内田先生。チームの振り分けは背の順で構わないですか？」

「任せる。そのかわり優先的にゲームに出してくれ。」

「分かりました。綿貫先生はどうします？」

「俺は審判でもするよ。」

「はい。よし。じゃ、背の順で並んで。」

背の順で並ぶと、加藤が1番でかく、次いで俺、その次が松本さんで、続いて大迫・タカ…、最後が大島だった。

チーム分けは背の高い順で蛇行しながら並び、1・4・5・8・9・12番目が同じチームになり、残りのメンバーが2番目に背の高い俺と同じチームとなった。俺のいるチームのメンバーは、伊藤先輩の他は全員1年で片山・桜井・中西、そして松本さんだ。

どうも見た目ウチのチームが劣る気がする。まずはお互いのチー

ムで1番小さい大島と桜井が休んでゲームがスタートするようだ。

20 ゲーム1

「背の順とはいえ、ちょっと辛いな…。」

伊藤先輩も同じように感じてるようだ。

「ディフェンスはマークに付かれた奴にマンツーマンで対応してくれ。」

「はい。」

「大介。」

「はい。」

「松本さんのフォロー頼むな。」

「頑張ります。」

「頼んだ。あと松本さん。」

「はい。」

「内田先生の指示通り、どんどんパス入れるから、勝負してね。」

「分かりました。」

「片山と中西は速攻走ってな。」

「はい。」

「あゝ。」

「なんだ片山？」

「俺のポジションは…？」

「ん？あつ、そうか。片山は中学時代センターだもんな。」

チーム事情つてやつか…。中学時代は1番でかかったのだろう。
片山の身長が決して低い訳ではないが、中学時代シューティングガードだったタカより弱冠小さいようだ。

「マークは多分、浅野だよな？」

「はい、多分…。」

「スモールフォワードやシューティングガードの勉強だと思って、
浅野のにマークしながら動きよく見ておけ。」

「…分かりました。」

違うポジションは不安だよ…。しかもマッチアップがタカじゃ
な…。うゝん不安だ。谷津先輩と中西君のとも不安だし…。伊藤
先輩は前島か…。先輩のところが頼りだな。

「大介。」

「はい。」

「攻撃は自由にやっていいぞ。なんて言っただって県中学の得点王だからな。」

「ありがとうございます。」

そう言ってもらえると、気持ち的に楽になった。でも、そんな事を言われなくても自由にやらせてもらうつもりだった。

「大介もパスが捌けると、もっといい選手になるんだから、回り見てフリーな選手いたらパス出してな。」

「はあ…。」

パスね…、そりや確率の問題で、頼れる奴がいてそれがフリーなら俺だってパスを出したけど、中学時代のチームはタカくらいしか頼りになる奴がいなかったのだ。シュートレンジの広い俺がボールを持てば、勝負以外考えられないのは仕方ない事だった。

「始めるぞ。」

ジャンプボールは当然俺と加藤。確か最後の公式戦では取れなかった。

相手チームで唯一データがないのが大迫さん。俺的には、この人次第でやりやすいかどうか決まる…。まずはお手並み拝見といくか…、と思っていると遠目からタカがあっさりスリーポイントシュートを決めてしまったのだ。

あの野郎！そして俺らの攻撃…、サボるつもりはないが、俺はスリーポイントラインの外にいた。加藤を外まで引っ張り出して、中

を松本さんと大迫さんの二人の状態にして、二人のプレーを見るためだ。このワンプレー次第では俺もプレースタイルを考えなくてはならない。

そしてボールは松本さんへ入る。直ぐさまフェイントを入れドリブルをして、大迫さんのディフェンスを振り切りにかかる。最後はフェイダウェイからのシュート。それは綺麗な放物線を描いてリングに吸い込まれた。『上手い…。』思わず加藤が呟いたのが聞こえた。

内田先生から『大迫！女だと思って遠慮してディフェンスしてるど、どんどんやられるぞ！厳しくチェックしろ！』と激が飛んだ。いや、あれはいいプレーだ。

2度目の向こうの攻撃は加藤にボールが入るも、俺のディフェンスを嫌い一旦ボールを味方に返した。そして谷津さんがカッティンし自らミドルシュートを打つも外れ、俺がリバウンドを取って終わった。

よし、点を取りにいつてやる。

今度は俺も、中でポジションを取ってボールをもらいにいった。振り向いてゴールの方を向くと、そこには大きな壁加藤が立ちはだかる。俺はフェイントを入れワンドリブルして体を半歩加藤の前に出すと、強引にジャンプしてリングにダンクをかましてやった。

初めて見る奴らはア然としている。

コートの外で見学していた大島が『加藤！お前そいつに何点取られるつもりなんだ？』と言い、続けて『練習なんだからファールギリギリで止めにいくつもりでいけよ。』と怒鳴っている。

でもこのゲームは、ウチらのチームの圧勝で終わるのだ。

21 ゲーム2

3分の休憩のあと2本目のゲームが始まる。

1本目は俺らのチームのセンター戦が機能し、相手はタカのスリーポイントシュート頼りの単調な攻めだった。速攻は両チーム共そんなに機能せずに終わっている。両チーム共上手く潰しあっているのだ。

大迫さんは松本さんに遠慮もあつたのかもしれないが、期待してたよりも戦力としては厳しいものがある。谷津さんも前島も予想通りのプレイヤーだ。

加藤に関しては、少し鍛えなきゃダメだ。コイツは体が固いものもあるが、自分の身体能力を活かし切れてない。ただ俺もそうだったが、普段の練習相手に事欠くのだ。中々中学に加藤クラスの体格の奴はいないだろう。だから練習では本気を出せず遠慮する傾向にあるのだ。だから伸び悩む。

その点、俺は地元のクラブチームに小さい時から顔を出していたせいか、練習相手に事欠くというのはなかった。小学の頃からデカかったが、その頃クラブチームに混ぜてもらえば、まだまだ小さい方から数えた方が早かった。そのためクラブチームではガードやフォワード、小学校のミニバスではセンターといった具合だ。だから今のような中も外もこなすハイブリッドなプレースタイルになったのだ。

あとタカは相変わらずシュート確率がいい。片山のディフェンスが甘いのもあるが、5本打って1本外しただけだ。

1本目は勝てたが、2本目のゲームでは、俺がこのチームで1番敵に回したくない奴が入ってくる。こいつがチームにいいリズムを与えるのは間違いない。フリーの奴を絶対見逃さないし、隙あらば自らカットインして切り込んでくる。こっちチームの桜井が未知数

だけに不安だ…。

そこで名前の知らないマネージャーが『1分前です!』と体育館にいるみんなに聞こえるように、知らせしてくれる。

「ウチのチーム集まって!」

伊藤先輩だ。別に作戦なんか無いだろうに…。

「大介お前外やれ!」

「えっ?」

「なんだ不服か?」

「いえ…。」

「スリーポイントも狙っていいぞ。」

「はい。」

何故伊藤先輩が俺に優しく、俺のプレイスタイルを知っているか…、それは先輩も地元のクラブチームで練習してたからだ。

そもそも先輩のお父さんが仲間を集めて作ったチームで、そのお父さんがミニバスのコーチをした。それでクラブの練習に誘ってもらったのだ。

「片山は中でやってみな。」

「えっ…、はい。」

「あと桜井は前島のマークな。俺が大島に付くから。」

おー、なんか的確な指示だ。さすが部長だけある。

「あと松本さんは、1本目と同じ感じで頑張つて。」

「はい。」

ちょうど指示が終わったところで、マネージャーが『時間です。』
と言ってきた。

おーし2本目もやってやろうじゃないの！

2本目はウチらがエンドからスタートとなった。伊藤先輩が上手く大島をマークしてるが、それでも何本かやられてる。

今回の俺はアウトサイドでのプレーなので比較的楽だ。加藤のディフェンスはリングの近くならガツガツ当たり負けしないし、リバウンドも強いので機能するが、外のディフェンスはザルもいいところだった。スリーポイントも4本中2本決めた。さすがにタカのようにはいかない。

松本さんは1本目同様大迫さんを圧倒してた。そして意外に、ローポストでプレイしてる片山も、中学時代やっていたポジションだからか、いい感じで頑張ってる。

問題は桜井だ。そこそこではない。まあ、ウチは女子部みたいな強豪チームじゃないから、練習も緩いし3年間辞めずに続けられるだろう。

2本目は同点で終わった。また3分の休憩である。10分ゲームを4セットやるそうだ。

「おい、大介。」

「はい。」

「次俺が休みだから、お前が考えろよ。」

「はい？先輩が休んだらダメですよ。ウチら機能しなくなります。」

「だから、次は順番で俺が休みなの。大介がゲームキャプテンだから、よく考えろ！」

「そんな…。」

「考えろって言ったって…。まさか俺が大島のマークに付くわけにもいかないし…。それより責めだよ…。誰がボール回す？運ぶ？中西？桜井？ダメだ…。ここはみんなに相談か？でも誰に？そんな俺を見兼ねたのかチームの一人が声をかけてきた。」

「次が一番大変だね。」

「そうなんだよ。」

「って、松本さん！？」

「苗字聞いていい？」

「えっ、ああ…、若宮。」

「若宮ね。若宮君はどこを潰したい？」

「ガードの大島。」

「次は？」

「シューターのタカかセンターの加藤。いや加藤だな。」

「ふん。私はガードのマークはした事無いから加藤君に付こうか？」

「いや、いくら松本さんでも加藤は…、ちょっと待って？加藤押さえられる自信あるの？」

「自信はないし、多分無理だけど、マッチアップはしてみたい。」

なんだこの強気な発言？試しにやってみるか…？

「分かった。」

2人で話していると、休憩中なのに、他の3人も集まってきた。

「次のディフェンスのマークなんだけど、加藤に松本さん。」

「はい。」

松本さんは強気だな…。

「で、大迫さんに片山君。」

「おう。」

「で、タカに…、浅野に中西君。」

「うん。」

「浅野にはピッタリ目のフェイス・トゥ・フェイスでマークして。」

「オツケーやってみる。」

「谷津先輩に桜井君。」

「分かった。」

「谷津先輩はロングレンジは無いから、離し気味で付いて、カットインだけ注意して。」

「OK。」

「で、俺が大島。」

これでよかったのか…？

「攻めは？」

「松本さんと片山君のローポストで始めよう。あとはマークがズレたら、俺が中に入るから。あと運ぶのは中西君が中心に桜井君とお願いします。」

「分かった。」

ダメなら俺が運べばいい。

「時間でーす。」

あれっ？1分前って言った？聞き逃しただけか？

「よし行こう！」

22 ゲーム3

守りはそこそこなんとかになった。松本さんは2回ほど加藤にぶつ飛ばされ、中西君もタカに嫌がられながらもピツタリ食らい付いて頑張ってる。

だけど、攻めだ。桜井君が大島に3度スティールされ、なかなかフロントコートにボールを運べないでいた。その結果、やはりボール運びも俺がやる事になったのだ。デカイ俺がやる仕事じゃないが、フロントコートまでボールがこなければ攻めることも出来ない。結局、攻めも守りもガードになってしまった。

けどガードのポジションが嫌いなわけじゃない。むしろセンターでガツガツやるより好きだ。俺のマークは前と変わらず加藤なのでパスは通しやすいし、シュートを打つにもドリブルでカットインしていくにも楽な間合いなのだ。

しかし、じわじわと点差が離されていく。

分かった事がある…、加藤って奴は、自分より上手い奴には弱気になり機能しないが、自分より劣る又は同じくらいの実力、又は体格的に有利なら、そこそこ働いてくれるということだ。この3本目も俺のマークで、ディフェンスの時はリング近くにいないが、オフエンスの時はマークが松本さんということもあって、ことごとくりバウンドをもぎ取っている。

でも自分より上手い奴に勝負していかないのは、上達しない奴の典型的なパターンだ。

向こうチームはミスマッチを有効に使い、上手く試合を運んでいく。

また松本さんが吹き飛ばされた。たまたまガードの俺の方に飛んできたから手を貸してあげたのだ。

「大丈夫？」

「ありがとう。」

手を差し出すと、それを握って立ち上がった。俺的にはなんでもない行為だったが、これを見ていた陽子が相当ヤキモチを妬いたみたいで、あとで大変だったのである。

「ディフェンスのマーク変わろうか？」

俺の聞き方が悪かったのか、彼女の闘争心に火が点いたらしい。

「やられた分はやり返すから、どんどんパス頂戴。」

「ああ、分かった…。」

俺の聞きたかった事は、オフENSEの事じゃなくてディフェンスの事だったのに…。それにやり返すといっても、攻めの時にマークしてるのは加藤じゃなく、大迫さんだし…。でもきつと、彼女の中ではやり返す事になるのだろう…。

結局3本目は序盤のリードが効いて、負けてしまった。

「大介は大島の事を、よく抑えてたよ。」

「そりゃ、どうも。」

「でも、お前がもっと攻めなきゃダメだよ。」

「ですね。」

「ラストは片山休みな。」

「やっと休みだー！」

あれっ？

「俺って休み無しですか？」

「お前は無しだ。」

「マジすか…？」

「バイトで来れない日もあるんだから、いる日くらいしっかりこなせ！」

「うつ…、はい…。」

確かにそうなのだが、少しくらいは休みたい。久々のバスケット事もあって、すでに足がパンパンなのだ。夜中、寝てる最中に足がつかなければいいのだが…。

4本目はセンターのポジションでガンガン勝負してやった。ダンクもかましてやったし、外からも何本か決めてきた。スクリーンで味方をフリーにしてやる献身的なプレーもして、チームを機能させたりもした。それに伊藤先輩が戻ってきたことですごく楽にプレー出来たのだ。

そしていつの間にか、女子の顧問の内田先生がいなくなった代わりに、女子の3軍にあたる選手達が、屋上からゾロゾロと移動してきた。おそらくその中に直江もいるのだろう。

女子部は総勢80人の大所帯で、そのうち1軍2軍の30人が新しい綺麗な体育館で練習している。それ以外のメンバーが3軍なのだ。その3軍全員が、1面しかないこの古い体育館でこのあと練習となる。

そもそもウチの女子バスケと女子バレーは全国レベルで、越県して入学してくる選手が毎年何人かいるらしい。そのうちの1人が松本さんなのだが、入学2週目にして、男子に混ざって練習するなんて可哀相な子だ。上級生を含め練習相手になる人がいないのだろう。レギュラーに大型な選手はいないのだろうか？もしいたとしても松本さんが上手過ぎて、相手にならないのかもしれない。

俺達男子は、ゲームのあとクールダウンに軽くストレッチをして上がりとなった。松本さんは1軍がいる体育館に戻って練習に参加するみたいで、ゲームが終わったあとすぐに新しい体育館へと移動してた。

「女子は何時頃までやるの？」

横でバッシュを脱いでいたタカに聞いてみると、

「このあと1時間くらいやるみたいよ。」

「それじゃ、帰り遅くなるんだな。」

「だな。」

それから俺達は部室に着替えに戻りに行くところだったのだが、体

育館の出入口のところで前島に声をかけられた。

「神田！ちよつといいか？」

まだ前島にとって俺は神田らしい。

「あつ、はい。」

「浅野は来なくていいよ。」

「…はい。大介先行ってるな。」

「おう。」

俺は前島について、体育館の1階にある格技場に入っていった。
ここは主に廃部寸前の柔道部が使ってる場所らしい。

「なんすか？」

023 前島（前書き）

ご無沙汰してます。長々放置してすみませんでした。

月9ドラマ『ブザービート』終わっちゃいましたね…。

023 前島

「なんすか？」

「お前いつから福島と付き合ってたんだよ？」

「えっ？」

「たたく…そんな事知ってどうするんだよ？」

「いいから、言われた事に答えればいいんだよ。」

「…3月からです。」

「最近だな。」

「ええ…。」

「なんか聞いているか？」

「なんか？微妙な言い方だな…。」

「先輩に関する事なんか話題にも上らないけど…例えばどんな…？」

「チツ…。聞いてないんだな？」

「だから何を？」

「聞いてないなら別にいい。もう行っていいぞ。」

「なんだそれ？」

「おい、神田。」

「なんすか？」

「お前、口の聞き方に注意しろ！」

急に先輩面か？

「気にいらないなら、いつでもタイマン受けますよ。タイマンが怖いなら別ですけど。」

「なっ、何を！？」

小学生の時と違って、今は俺の方が完全に体格で上回っている。俺は黒帯ではないが、空手の実力はそんなに変わらないだろう。

「いいだろ…。」

言ったその場で上段蹴りが跳んできた。それを左腕で受け止めずかさず足首を掴んだ。そのままの態勢から下段蹴りでもう片方の足を払うと、前島の体が宙に浮いて『ウワッ！』という声と“ドスン”という音と共に畳に落ちた。

すかさず前島のマウントポジションを取り、右の拳を振り上げ一気に前島目掛けて振り下ろした…

振り下ろしたが、鼻先で寸止めしてやった。

「……」

「迷惑なんで陽子にちよっかい出すの止めてもらえますか？」

「出してねえよ……」

「……」

「しねえから……、福島には手え出さねえから……。どいてくれ……」

……、
福島には……？には……、福島にはだと……、この野郎マジでムカつく……、

あれはちょうど2年前の夏休み……、ある噂が広まった。

その噂とは、バスケット部女子の屋良由紀子という子が夏休み中の部活の帰り道、何者かに性的暴行を受けた……、要は犯された……という噂だった。更に噂は拍車がかかり、彼女らしき女の子の淫らな写メが、サイトに載っていると噂になったのだ……、

俺の学年のバスケット部は一部の男女仲が結構良かった。その女子の

グループには陽子が入っていなかったのは残念だったが……。そして仲良しグループの中から、自然とカップルが出来上がっていったのだ。

その子もその流れに漏れず、男バスの奴と付き合っていたのだが、そいつとは別にある男から交際を申し込まれていた。

それが一学年上の前島だった。何度も交際を迫り、その度に『彼氏がいるから……。』と断わられた。それが納得いかない前島は、ストーリーカー紛いにしつこく付きまとっていたらしいのだ。

2学期に入って1ヶ月経った頃、その子は転校してしまった。表立ったイジメはなかったものの、回りの視線や、影でこそこそ話されるのに耐えられなかったのだろう……。

真相は分からない。だが一組のカップルが破局したのは事実だった。

「前島さんよ……、」

「どけって言うてんだよ！」

前島は下で体を左右に振ってるが、この態勢では効果はなさそうだ。

「一つ教えてもらいてんだけど……、」

「……、なんだ……？」

「由紀子……、屋良由紀子やったの前島さんすか？」

「チツ…、お前もやったと思ってたのかよ？」

「やってないんすか？」

「やるわけないだろが！」

「じゃ、誰が…？」

「今更、そんな事知ってどうする？」

「もしあんただったら、由紀子と勇の代わりに一発殴る。」

「ああ、丹羽勇な。」

「ああ、そうだ。」

「あんな奴…あんな弱い奴と付き合ってたのが笑えるっの。」

「あんな奴じゃねえ、俺のダチだったんだよ…っっていうか、弱いってなんだよ？」

「ダチ？同じ部活にいただけだろ？それにお前に直接関係ないだろ？」

「確かに俺は関係無いかもしれない、でもあんな噂が流れないで彼女があのまま学校にいたら…、勇がグレてバスケ辞めてなかったら…、」

「そっさ、噂さ。」

「は？でもあんたが由紀子に付きまどったのを、見かけた奴は沢山いる。」

「あの時はまだガキだった。」

「まだ2年経ってねえよ。」

「チッ…、お前には関係ねえだろ…、福島には手出ししねえから、どいてくれ。」

「うおおお………………」

また、右の拳を振り上げたが、殴る価値がない…その事に気付き、振り下ろすか迷っていると、

「待て、言う。喋るから止めろ。」

意外とヘタレになっていた前島がいた。ガキの頃は威張りくさってたのに…。

「…。」

「さっきも言ったが、あれは噂だよ。」

聞こうとした俺が馬鹿だったか…？

「俺が噂を流したんだ。」

「噂を流した？何の為に？」

「変な噂を流せば、付き合ってる奴と別れると思ってな…。でも効き過ぎた…、まさか転校するとは…。」

「実際襲ったんじゃないのか？」

「そんな犯罪出来るわけねえだろ？それに誰が彼氏が早い段階で教えてくれてたら諦めてやったのに…。」

勇はこんな奴のこんな思惑のために堕ちていったのか…、

「…。」

「なあ、喋ったんだからどいてくれ。」

なんか、やり切れない怒りが沸き上がってきた。

「うおおお…。」

上げたままだった拳を俺は振り下ろした。『ヒィッ』前島は情けない悲鳴と共に目を閉じた。

振り下ろした拳は、前島の顔の右側の畳に『ドスン』と、叩き落とした。こんな奴殴る価値もねえ…、

「神田…。」

震えてるような前島の声が聞こえた。

「なんすか？」

「丹羽って、どこの高校行っただ？」

「勇…！？勇なら通信制にしたみたいですよ。ついでに言うとかボクシングジムのプロ養成コースに通い始めたって噂ですけどね。」

「プロ？」

「ええ…。最近はあるってないから分かりませんが、卒業式の人に誰かが言っていましたよ。」

「そっ、そうか…。」

俺はそれで前島から離れてやった。そして、見下ろしながら、

「俺を気に入らなければ、いつでも相手しますので…。」

「…。」

「そう言えば、さっき勇の事、弱い奴って言いました？」

「ああ…。」

そういえば勇が何日か学校を休んだあとに、顔を腫らして登校したって聞いたことがある。おそらく前島に何か聴きに行き、喧嘩を仕掛けて逆にやられたんだな…。

「言っておきますけどあいつの性格はしつこいですから、気を付けた方がいいですよ。」

「かつ、神田！」

「なんすか？」

「さっきの話、丹羽にしないでくれ！」

「言わないですよ。連絡も取ってないから会う機会もないですし。でも、もう勇に目を付けられてるんなら、言わなくても同じじゃないですか？ いつかリベンジにきますよ。」

「そんな…。」

「そんじゃ…。」

そう言って格技場をあとにした。許して欲しけりやプライド捨てて頭下げに行けばいいのに…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6041f/>

ブザービーター

2010年10月9日14時48分発行